

多賀城市内の遺跡 2

—平成26年度発掘調査報告書—

新田遺跡
山王遺跡
高崎遺跡
東田中窪前遺跡

平成27年3月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市内には特別史跡多賀城跡附寺跡や、多くの埋蔵文化財包蔵地があり、それらは市域の約4分の1にも及んでおります。これら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは我々の重要な責務であり、当教育委員会としても開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を適切に保護し、活用に努めているところです。

本書は、平成26年度に国庫補助事業として実施した9件の発掘調査の成果を収録したものです。そのなかで、新田遺跡第100次調査については、古墳時代前期の水田跡を発見しましたが、さらに同遺跡では初めてとなる土壌の年代測定を行ったところ、4世紀頃のものであることが科学的にも明らかとなりました。また、山王遺跡第143次調査では、多賀城南面に施行された古代都市の基幹道路であった東西大路の延長線上で、その一部を新たに確認しました。都市空間から500m以上西に外れた地点ではありましたが、同様の規模・構造を維持したまま建設されていたことを確認しました。

いずれの調査も、規模としては大きなものではありませんが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、本市の具体的な歴史像の解明につながるものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査に際し、御理解と御協力をいただきました土地所有者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成27年3月

多賀城市教育委員会

教育長 菊 地 昭 吾

例　　言

- 1 本書は、平成26年度の国庫補助事業による発掘調査9件の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、各遺跡とも第1次調査からの通し番号である。
- 3 測量法の改正により、平成14年4月1日から經緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るために、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。また、本書で報告している調査では、平成23年3月11日の東日本大震災以降に測量した座標を用いている。震災以前の調査成果に関しては、座標値を整合させるために、再測量の成果に基づき東に約3m、南に約1mの補正をかけている。
- 4 採団中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、『新版標準土色帖』(小山・竹原：1996)を参考にした。
- 6 執筆は、I～VIを武田健市、VII・Xを石川俊英、VIIを小原一成、IXを高橋純平が担当し、編集は武田が行った。資料整理及び図版作成は各執筆担当者が行い、遺物の写真撮影は村上詩乃と城口貴彰が担当した。
- 7 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

I	遺跡の地理的・歴史的環境	1
II	新田遺跡第98次調査	3
III	新田遺跡第100次調査	6
IV	山王遺跡第143次調査	20
V	山王遺跡第144次調査	25
VI	山王遺跡第145次調査	39
VII	高崎遺跡第98次調査	58
VIII	高崎遺跡第99次調査	62
IX	高崎遺跡第100次調査	64
X	東田中窪前遺跡第7次調査	100

調　　査　　要　　項

- 1 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾
- 2 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 板橋秀徳
- 3 調査担当者 多賀城市埋蔵文化財調査センター
副主幹 武田健市 研究員 石川俊英 小原一成
調査員 高橋純平 村上詩乃 城口貴彰
- 4 調査協力者 鈴木源 鈴木経子 櫻井正七 熊谷米子 郷家肇 伊藤やす子 浦山恵弘 浦山淳
浦山清子 浦山秀樹 伊藤ヤスエ 加藤直哉 伊藤浩 今野智之 今野純子 白鳥
純一 白鳥礼美 芦野よしゑ 芦野勘治 大友長夫 大友健 伊藤重次 斎藤万
後藤幸治 武田一夫 伊藤和典 伊藤トモイ
日本住宅株式会社 株式会社アドバンテージ 株式会社気仙沼商会 東北ミサワホ
ーム株式会社 株式会社タウンド 株式会社高勝の家 株式会社フジ企画研究所
仙台農業協同組合
- 5 調査従事者 涅美静香 阿部純一 阿部信夫 石井眞六 小川勝彦 加藤義宏 鎌田修一 菊地
清喜 工藤敦子 小松まり 小松美樹 今野和子 西條金三 櫻井良博 佐々木正
範 佐藤良雄 志賀定夫 須田英敏 高橋由美子 戸枝瑞枝 中島弘 根本清 平
塚武慶 藤田恵子 松川謙二 三浦侑士 矢島恒男 山田理 若生要一
- 6 整理従事者 赤沼たみ 小泉絢子 佐藤ゆかり 千葉郁美 宮城ひとみ

調査一覧

No.	遺跡・調査名	所 在 地	調査期間	調査面積	調査担当者
1	新田遺跡第98次	南宮字庚申248番ほか12筆	5月23日～6月6日	224m ²	武田・石川
2	新田遺跡第100次	山王字南寿福寺9番10、12番13	7月31日～9月12日	27m ²	武田・石川
3	山王遺跡第143次	山王字西町浦34番4	6月3日～6月21日	54m ²	武田・石川
4	山王遺跡第144次	山王字西町浦95番2・10の各一部	7月29日～9月13日	32m ²	石川・高橋
5	山王遺跡第145次	南宮字伊勢70番ほか11筆	10月23日～1月14日	567m ²	武田・石川・高橋
6	高崎遺跡第98次	高崎一丁目13-6の一部	4月11日～4月19日	19m ²	小原
7	高崎遺跡第99次	高崎一丁目1番1号の一部	4月15日～4月16日	39m ²	石川
8	高崎遺跡第100次	高崎一丁目14-1	10月21日～12月4日	250m ²	小原・高橋
9	東田中庭前遺跡第7次	東田中一丁目236-4	7月29日～8月30日	230m ²	石川

凡 例

1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。

S I : 穴住居跡 S E : 戸戸跡 S D : 溝跡 S K : 土壙 P it : 柱穴及び小穴
S X : 道路及びその他の遺構

2 奈良・平安時代の土器の分類記号は下記のとおりである。詳細は『市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』(多賀城市教育委員会 2003)で報告している。

(1) 土器器坏

A類：ロクロ調整を行わないもの

B類：ロクロ調整を行ったもの

B I 類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

B II 類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

B III 類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

B IV 類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

B V 類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

B I ・ B II 類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する

(2) 土師器甕

A類：ロクロ調整を行わないもの

B類：ロクロ調整を行ったもの

(3) 須恵器坏

I 類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

II 類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

III 類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

IV 類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

V 類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

I ・ II 類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する。

3 瓦の分類は「多賀城跡 政府跡 図録編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1980)、「多賀城跡 政府跡本文編」(宮城県多賀城跡調査研究所 1982)の分類基準に従った。

4 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田樹跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年（934年）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え方と、『扶桑略記』延喜15年（915年）7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考え方がある（町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10C頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991）。本書では、これらの研究成果をもとに、灰白色火山灰を10世紀前葉に降下したものと理解する。

I 遺跡の地理的・歴史的環境

多賀城市は、宮城県の中央やや北東寄りに位置し、南西側で仙台市、北西側で利府町、北東側で塩竈市、南東側で七ヶ浜町と接している。市内の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する二級河川砂押川を境に、東側の丘陵部と西側の沖積地に二分される。丘陵部は、松島・塩釜方面から延びる標高40～70mの低丘陵であり、南西に向かって枝状に派生している。沖積地と接する付近では、谷状の地形を形成しており、緩やかではあるが起伏に富んだ様相をみせる。沖積地は、仙台平野の北東部に相当する。仙台市岩切方面から東に向かう県道泉・塩釜線沿いには、標高5～6mの微高地が延びており、その北側には低湿地が広がっている。一方、南側には大小の微高地や低湿地、旧河道などがあり、海岸に近い場所では浜堤列も確認できる。

市内には、40を超える遺跡が所在している。西側の沖積地から丘陵部の西端にかけては、新田・山王・市川橋・高崎・西沢遺跡など市内でも有数の規模をもつ遺跡が隣接して分布している。これらの遺跡で発見された遺構や遺物には、陸奥国府が置かれた多賀城や付属寺院である多賀城廃寺と密接に関わるものが多く認められ、この時期に限ってみれば一連の遺跡群と捉えることができる。一方、海岸線に近い南東部には、浜堤上に西側から八幡沖・東原・西原・元舟場遺跡があり、七ヶ浜町と接する浜堤から丘陵にかけては大代貝塚や大代横穴墓群、柏木遺跡などが所在している。

以下、今年度に発掘調査を実施した遺跡の概略について述べる。

新田遺跡は標高5～6mの微高地上に立地しており、東西約0.8km、南北約1.6kmの範囲に及んでいる。縄文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では大小の溝で区画された屋敷跡が多数発見されている。このうち、寿福寺地区では12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。

山王遺跡は標高3～4mの微高地上に立地しており、東西約2km、南北約1kmの範囲に及んでいる。これまで、弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、直線道路によって区画された古代の方格地割、大規模な区画溝を巡らせた中世の屋敷跡などが発見されている。このうち、古代の方格地割は南北大路と東西大路の二つの幹線道路を基準とし、東西・南北の小路によっておよそ1町四方の区画を造成したものである。このまち並みでは、上級役人の邸宅や中・下級役人の住まいが確認されており、掘立柱建物跡や井戸跡などが多数発見されている。

高崎遺跡は低丘陵の西端部に立地し、東西約1.3km、南北約1kmの範囲に及んでいる。これまで、古墳時代から近世の遺構・遺物が発見されており、特に古代では、多賀城廃寺跡の西側で約80軒の堅穴住居跡をはじめ、多数の掘立柱建物跡や井戸跡などが確認されている。また、井戸尻地区では大量の灯明皿が一括廃棄された状況で検出され、周辺で万灯会のような仏教儀式が執り行われていたと考えられている。

東田中塙前遺跡は、高崎遺跡の南端部に隣接しており、標高40～70mの低丘陵南西端部に位置している。南側300m付近を砂押川が東流しており、その西側には仙台平野が開けている。これまでの調査では、遺跡中央付近で実施した第1次調査で布堀りを施した柱列跡や溝跡、北端部で実施した第2次調査で堅穴住居跡3軒をはじめ溝跡や土壌が発見されている。一方、1979年に実施された遺跡分布調査において、遺跡中央付近に幅10m、深さ4mの空堀があり、それを挟んで南北に平坦面が形成されていたと報告されている。これらは現況では確認することができないものの、本遺跡の南東200m付近は通称「館屋敷」と呼ばれ中世「高崎氏」の館跡と考えられていることから、これらに関係する館跡が存在した可能性も考えられる。



1 新田漁港第98次調査
2 新田漁港第100次調査
3 山王漁港第143次調査
4 高崎漁港第100次調査
5 山王漁港第145次調査
6 高崎漁港第99次調査
7 高崎漁港第100次調査
8 高崎漁港第100次調査
9 高崎漁港第100次調査

第1図 平成26年度調査地一覧

II 新田遺跡第98次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮字庚申地内における共同住宅（社員寮）新築に伴うものである。平成26年2月、社員寮の建設を計画している株式会社気仙沼商会より、当該区における共同住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、現県道から住宅に至る部分の道路幅と、住宅の基礎工事の際に約1.7mも掘削を行うことが示されていた。計画地の大部分が遺跡外であったものの、遺構の分布状況及び範囲を確認するために、試掘・確認調査を実施する方向で協議を進めた。4月24日に気仙沼商会から発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受け、5月23日より現地調査を開始した。

はじめに、共同住宅建設箇所に「ロの字」状に設けた調査区（1～4区）で、重機による表土除去を行った。いずれの調査区でも遺構・遺物は確認されなかつたことから、直ちに調査区の写真撮影を行うとともに、作業員を動員して部分的に土層堆積状況の断面図を作成した。28日、道路部分（5・6区）の試掘に取り掛かったが、1～4区と同様な状況であった。6月6日、雨天が続き遅れていた1～4区の埋め戻しを行い、本調査の一切を終了した。

2 調査成果

（1）層序（第2図）

今回の調査では、2・5・6区で一部深く掘り下げを行い、現表土も含め最大10層の堆積を確認した。

I 1層：5・6区で確認した、現代の造成による盛土である。厚さは0.8～1.0mである。

I 2層：1区で確認したオリーブ黒色粘土であり、旧水田耕作土である。厚さは20～30cmである。

II 層：1区南端で確認したオリーブ黒色粘土であり、厚さは約10cmである。

III 層：1区で確認した黒褐色粘土であり、厚さは約10cmである。

IV 層：1・5・6区で確認した黄灰色粘土であり、厚さは10～20cmである。III層との層離面に灰白色火山灰粒が混入している。

V 層：1区で確認したオリーブ黒色粘土であり、厚さは10～20cmである。底面には著しい凹凸が確認される。

VI 層：1・5・6区で確認した灰オリーブ粘土であり、厚さは約20cmである。

VII 層：1区で確認した灰色粘土であり、厚さは約10cmである。

VIII 層：1区で確認したオリーブ色砂であり、厚さは約20cmである。



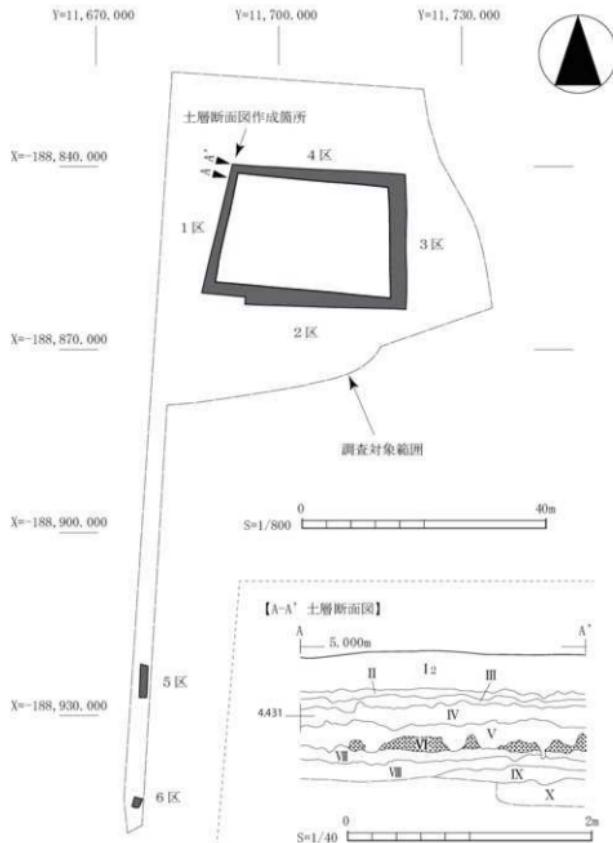
第1図 調査区位置図

IX 層：1区で確認した灰色粘土であり、厚さは約10cmである。

X 層：1区で確認したスクモ状の灰色粘土であり、厚さは20cm以上である。

(2) 発見遺構と遺物

今回の調査では、遺構・遺物は全く発見することができなかった。粘土層が幾層にもわたり堆積している状況であることから、本地区は居住空間には適していなかったものと判断される。



第2図 調査区配置図及び土層断面図



2区全景(西より)



1区西壁断面



6区南端部

III 新田遺跡第100次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字南寿福寺地内における個人住宅新築に伴うものである。平成26年6月、地権者より当該区における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に直径60cm、深さ3.5～7.2mの柱状改良を35箇所で施すことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺跡保存の協議を行ったものの、申請どおりの工法で着手することに決定したことから、本発掘調査を実施することとなった。7月24日に地権者から発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受け、7月31日より現地調査を開始した。

はじめに、重機による住宅建築部分の表土除去から取りかかり、現表土の約1m下にある褐色砂質土（II層）上面で、SD2089溝跡や小柱穴を確認した。8月5日から作業員を動員し、遺構の精査及び埋土の掘り下げを行い、7日に調査区全景写真を撮影した。一方、これらの作業と並行して、排水用及び断面観察用のサブトレーナーを調査区四周に設けたところ、II層下層の黒色粘土（III層）に畦畔状の高まりが断面に認められた。非常にわずかな高まりであったが、周辺地区で確認されている古墳時代の水田層が存在する可能性が高くなった。盆休暇をはさみ、19日より遺構の断面図を作成し、翌20日にII層上面の調査を終了した。21日より、II層を掘り下げ、III層の調査に取り掛かった。その結果、断面観察のとおり東西・南北方向の畦畔を確認し、III層が水田層（SX2088）であることが明らかとなった。以後、畦畔検出状況の写真撮影、平面図作成、耕作土上面に残るII層の掘り下げ、調査区壁面の断面図作成等を順次行い、9月5日にSX2088完掘状況の写真を撮影した。12日、重機による埋め戻しを行い、本発掘調査的一切を終了した。

2 調査成果

（1）層序（第2図）

今回の調査では、現在の表土以下9層の堆積を確認した。

I 1層：現代の造成による盛土で、厚さは80～90cmである。

I 2層：全域で確認した暗褐色粘質土であり、造成前の旧水耕作土である。厚さは6～14cmである。

II 層：全域で確認した無遺物層であり、さらに3層（II 1～3）に細分することができる。II 1は厚さ10～15cmの褐色砂質土、II 2は厚さ5～15cmのにぶい黄褐色粘質土、II 3は厚さ3～6cmのにぶい黄橙色粘質土である。このうち、II 1上面は中世の遺構検出面である。

III 層：黒褐色粘土であり、厚さは5～8cmである。古墳時代前期の水耕作土であり、畦畔と水口



第1図 調査区位置図

を確認した。土壤分析の結果、イネのプラント・オパールが3,000個/g検出されている（附章1）。

IV 層：黒褐色粘質土であり、厚さは6～12cmである。土壤分析の結果、IV層と同様に古墳時代前期の水田耕作土であることが明らかとなっている。

V 層：にぶい黄褐色砂質土の無遺物層であり、厚さは15～20cmである。

VI 層：黒褐色粘土であり、厚さは5～12cmである。土質から水田層の可能性も考慮し、土壤分析を行ったが、イネのプラント・オパールは検出されなかった（附章1）。なお、AMS放射性年代測定により、弥生時代後期頃の年代観が示されている（附章2）。

VII 層：黒色粘土であり、厚さは15～25cmである。

VIII 層：灰黄褐色粘質土であり、厚さは16cm以上である。

（2）発見遺構と遺物

今回の調査では、IV・III層が水田層であることを確認したほか、III層上面で溝跡や柱跡を発見した。以下、層序ごとに発見した遺構について記載する。

（a）IV・III層発見遺構

S X2088水田跡（第2図）

【位置】調査区全域で発見した。

【検出面】IV・III層が水田層であり、2時期の変遷（IV層：A期→III層：B期）と捉えた。

・A期：畦畔などの施設は確認できなかつたが（註1）土壤分析の結果、3,600個/gの高密度でプラント・オパールが検出されており、水田耕作土である可能性が示唆される（附章1参照）。

【耕作土】黒褐色粘質土であり、厚さは6～12cmである。底面には耕作時の痕跡と考えられる土層の乱れが顕著に観察できる。

・B期：畦畔10条（畦畔1～10）、水口2カ所（水口1・2）と、これらによって区画される水田7区画（区画①～⑦）を確認した。プラント・オパール密度は3,000個/gである（附章1）。

【区画の規模・耕作土】区画の規模全体が明らかかなものは、区画⑥のみである。南北2.4m、東西2.1～2.4mであり、北側に区画②と連結する水口が設けられている。これ以外では、東西の規模が確認できるのは区画②・③、南北の規模が確認できるのは区画⑦がある。区画②・③の規模はそれぞれ東西1.2m、1.7m、区画⑦は南北2.2mである。田面の残存標高を見ると、区画①が5.014m、区画④が5.034m、区画⑤が5.074mであり、南から北へ、東から西へ向かって僅かに低くなっている。それぞれの比高は、区画①～④間で2cm、区画①～⑤間で6cmである。耕作土は黒褐色粘質土であり、厚さは5～8cmである。底面には耕作時の痕跡と考えられる土層の乱れが顕著に観察できる。

【畦畔の規模・方向】東西方向の畦畔4～7はおよそ同一線上に配置されているのに対して、南北方向の畦畔1・8及び2・9は畦畔同士の交差部分を境に、畦畔の幅1条分ほど違えて敷設されている。規模は上幅20～40cm、下幅40～60cmであり、残存する高さは4～6cmである。方向は東西方向の畦畔では西で約5度北に偏しており、南北方向の畦畔はこれに直行するように設けられている。

【水口の規模・壁・底面】水口は区画②・⑥間（水口1）、区画③・⑦間（水口2）に設けられている。

註1：A期については、畦畔等の施設を確認することはできなかつた。しかし、壁面観察より後続するB期と同位置で土層の高まりが確認できることから、およそB期と同位置に畦畔を想定することもできよう。

上幅は水口 1 が10cm、水口 2 が35cmである。

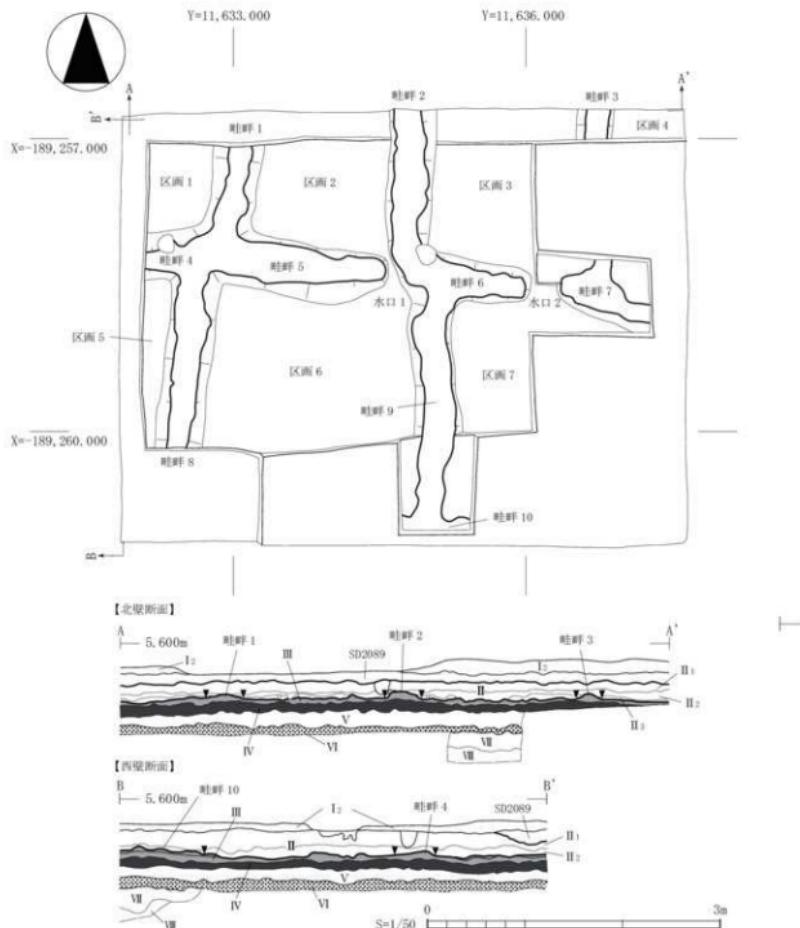
【遺物】出土していない。

(b) II 層上面発見遺構

S D2089溝跡 (第9・12図)

【位置・形態】調査区北部で発見した、東西方向の溝跡である。

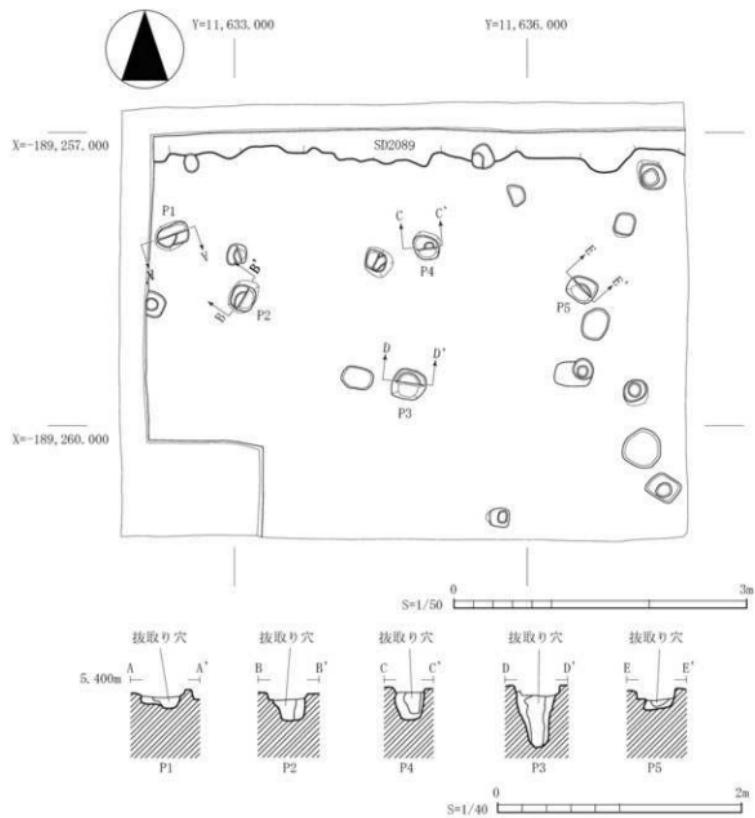
【方向・規模】方向は、およそ東西の発掘基準線に沿っている。規模は長さ4.8m以上、幅70cm以上、深さ14cmである。



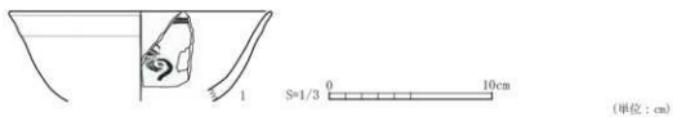
第2図 III層水田跡平面図・壁面断面図

【壁・底面】壁は非常に緩やかに立ち上がっている。底面のやや起伏が認められるが、丸みを帯びて窪んでいる。

【埋土】締りの弱い褐色粘質土である。



第3図 II層上面検出遺構



番号	種類	遺構層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 団版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	青磁 瓶	SD2089 1層		旋削：草花					R1	大宰府陶年 青磁瓶 1~4類

第4図 SD2088 出土遺物

【遺物】青磁碗の小片が出土している。

柱穴群

今回の調査では複数の柱穴を確認している。規模は一边約30cm前後の方形、又は同規模の梢円形のものであり、柱痕跡や柱抜取り穴が確認できる。掘り方及び抜取り穴の埋土は黒色粘質土が主体であり、掘り方にはオリーブ黄色砂質土ブロックが多量に混入するものが多い。

3 まとめ

S X2088は中世の構検出面であるII層より約30cm下層、標高値でみると約5mの高さで発見した水田跡である。黒色粘土が主体の水田耕作土及び畦畔を検出しており、これと近似する水田層は本遺跡南寿福寺地区や後地区をはじめ、東側に隣接する山王遺跡で数多く確認されている。いずれも古代の遺構検出面である自然堆積層に厚く覆われており、標高2.2～4.8mの高さで検出しており、出土した遺物から概ね古墳時代前期頃と考えられている。

今回発見したS X2088は周辺地区の水田層とはことなり、上面に古代の遺構検出面となる自然堆積層は確認されなかった。しかし、採取土壤の放射性炭素年代測定により、S X2088が2世紀中頃から3世紀中頃、SX2088下層のIV層が2世紀中頃～4世紀初め頃といった結果を得ておらず、近年実施した山王遺跡第88・128次調査の分析とも一致している。

なお、本調査区北側40mの近接地で実施した第15次調査において、中世の遺構検出面下層より水田跡（S X1585）を確認している。確認した耕作土上面の標高値は5.5mであり（註2）、水田1区画の面積は6～8m²である。年代は、山王遺跡第24次調査で発見されている古墳時代前期の水田跡（第IV層）と比べると、発見した層序（標高値）が2.5m近く高いことや、1区画当たりの面積が極端に狭いこと（註3）から、古墳時代中期頃のものと推測していた。一方、今回発見したS X2088は、耕作土上面の標高値が約5mであり、水田1区画当たりの面積も区画⑥で約4.6m²、それ以外もおよそ4.5m²前後と推測されるなど、山王遺跡第24次調査第IV層水田跡よりもS X1585と近似している。層序関係をみても、いずれも中世の遺構検出面下20～30cmで検出していることや、水田区画の方向がおよそ東西、南北に沿っているなども共通している。位置関係なども考慮すれば、S X1585はS X2088と同様に古墳時代前期の水田跡と捉える方が妥当性があろう。なお、S X1585とS X2088は、標高値で50cm程の比高差がある。40mと近接した範囲では、極めて大きな差と考えられることから、両水田の間には、これらを明確に分けるような段や水路等の存在も推測される。

S D2089はII層上面で発見した溝跡である。埋土から、太宰府分類で椀I～4類とされている青磁碗が出土していることから、12世紀中頃から後葉以降のものと考えられる。なお、柱穴については、年代が推測できるような遺物は出土していない。しかし、埋土はS D2089と類似していることから、同じ頃のものと考えておきたい。

参考文献

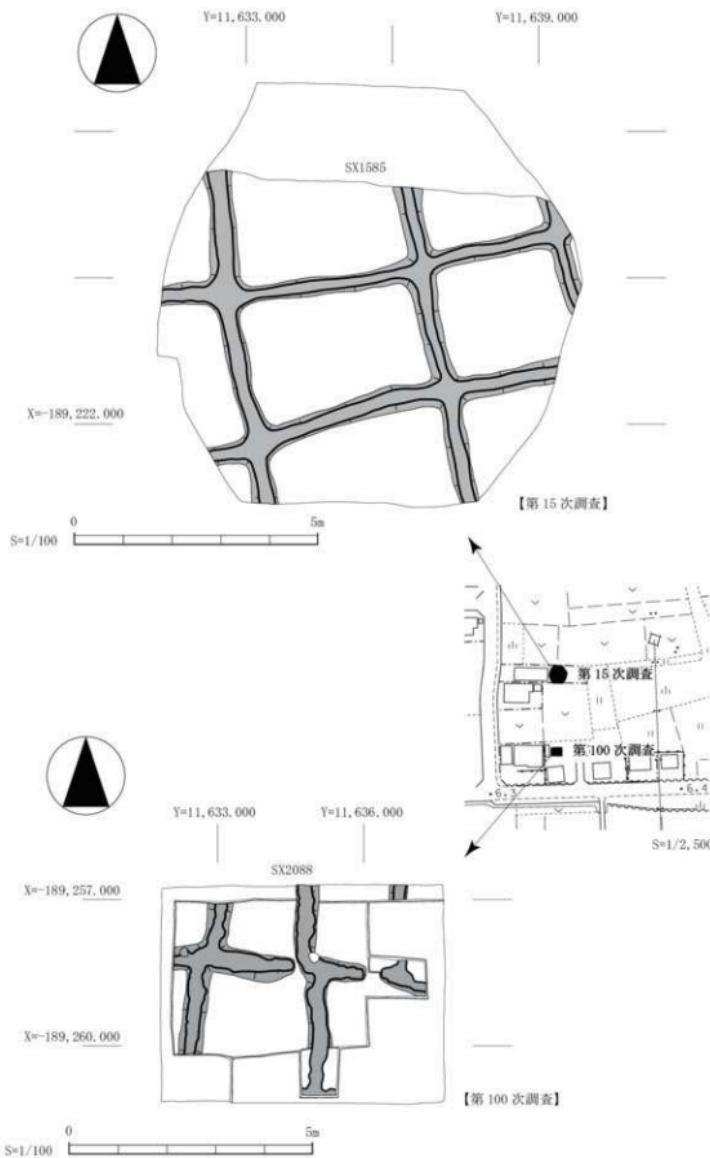
太宰府市教育委員会『太宰府糸坊跡X V～陶器類分類編一』太宰府市の文化財第49集 2000

多賀城市教育委員会『山田遺跡－第15・17・18次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第43集

多賀城市教育委員会『山王遺跡 I－仙塙道路建設に係る発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第45集

註2：調査時の標高値はおよそ5.8mであるが、多賀城市では東日本大震災による地盤沈下が30cmであったことから、これを差し引いた標高値を示した。

註3：山王遺跡第24次調査第IV層水田跡1区画当たりの面積は、14.72～40.05m²である（多賀城市教育委員会「第V章 J・N区の調査」『山王遺跡 I－仙塙道路建設に係る発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第45集 1997）。



第5図 第15・100次調査検出水田跡比較図



S X 2088 水田畦畔検出作業風景（南東より）



S X 2088 水田畦畔検出（南より）



II層上面遺構検出状況（南東より）



II層上面P2断面



青磁碗 第4図1 R1

附章1 新田遺跡第100次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとで微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

ここでは、新田遺跡第100次調査における稻作の可能性を検討する目的で、プラント・オパール分析を実施した。

2. 試 料

分析試料は、試料№1～№6 の計 6 点である。なお、調査報告書の層序との対応関係は、以下のとおりである。

№1 : II 2 層 №2 : III 層 №3 : IV 層 №4 : V 層 №5 : VI 層 №6 : VII 層

3. 分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1 gに直径約40 μmのガラスピーブを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が500以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1 g 中のプラント・オパール個数（試料1 gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-2} g ）を乗じて、単位面積で層厚1 cmあたりの植物体生産量を算出した。

各分類群の換算係数は、イネ（赤米）は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、スキ属（スキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山, 2000）。

4. 結 果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、キビ族型、ヨシ属、スキ属型、タケ亜科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他）および未分類である。また、プラント・オパールの他に海綿骨針が認められた。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

1) 試料№1

プラント・オパール密度が低く、タケ亜科のメダケ節型、チマキザサ節型が少量検出された。

2) 試料№2

イネ、キビ族型、ヨシ属、スキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出された。ヨシ属が優占し、イネも高い密度である。

3) 試料№3

イネ、ヨシ属、スキ属型、メダケ属型、ネザサ属型、チマキザサ属型、ミヤコザサ属型および海綿骨針が検出された。イネが優占するが、全体にプラント・オバール密度は低い。

4) 試料No.4

イネ、ヨシ属、スキ属型、メダケ属型、ネザサ属型、チマキザサ属型および海綿骨針が検出された。試料No.3同様、全体にプラント・オバール密度が低く、イネが優占する。

5) 試料No.5

ヨシ属、スキ属型、メダケ属型、チマキザサ属型および海綿骨針が検出された。プラント・オバール密度は低く、スキ属が優占する。

6) 試料No.6

ヨシ属、スキ属型、メダケ属型、チマキザサ属型、ミヤコザサ属型および海綿骨針が検出された。全体にプラント・オバール密度が低い。

5. 新田遺跡第100次調査における稲作と推定される周辺植生・環境

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、イネのプラント・オバールが試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。ただし、仙台平野（仙台市域、多賀城市域）では、これまでの調査で密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満でも水田遺構が検出された例が多く報告されていることから、ここでは3,000個/gを目安とする。

本調査地では、試料No.1～No.6について分析を行った。その結果、試料No.2、試料No.3、試料No.4よりイネのプラント・オバールが検出された。このうち、試料No.2と試料No.3ではプラント・オバール密度がそれぞれ3,000個/g、3,600個/gであり、稲作跡の可能性の目安とされる3,000個/gに達している。このことから、これらの試料が採取された層準において稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。また、試料No.4では2,400個/gと比較的高い密度である。したがって、試料No.4が採取された層準では調査地もしくは近傍で稲作が行われていた可能性は考えられる。

イネ以外の分類群では、ヨシ属が試料No.2、試料No.5および試料No.6で優占している。したがって、これらの試料の層準では調査地は湿地あるいは湿地に近い環境であったと推定される。また、スキ属型が試料No.2、試料No.5で比較的高い密度であることから、これらの層準では調査地の周辺の比較的乾燥したところにはスキ属が生育していたと推定される。

6.まとめ

新田遺跡第100次調査においてプラント・オバール分析を行い、稲作の可能性について検討を行った。その結果、試料No.2、試料No.3の層準において稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、試料No.4の層準では調査地もしくは近傍で稲作が行われていた可能性が示唆された。試料No.2、試料No.5さらに試料No.6の層準では、調査地は湿地もしくはそれに近い環境であったと推定された。また、試料No.2と試料No.5の層準では、周辺の比較的乾いたところにはスキ属などが生育していたと推定された。

参考文献

- 杉山真二（1987）タケア科植物の機動細胞壁酸体、富士竹類植物園報告、31, p.70-83.
杉山真二（2000）植物壁酸体（プラント・オバール）、考古学と植物学、同成社、p.189-213.
杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞壁酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—、考古学と自然科学、20, p.81-92.
藤原宏志（1976）プラント・オバール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の壁酸体標本と定量分析法—、考古学と自然科学、9, p.15-29.
藤原宏志（1998）稲作の起源を探る、岩波新書。

表1 新田遺跡第100次調査のプラント・オバール分析結果

検出密度 (単位: × 100 個/g)

分類群(和名・学名) \ 層位		No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
イネ科	Gramineae (Grasses)						
イネ	<i>Oryza sativa</i>		30	36	24		
キビ族型	<i>Panicoid type</i>		6				
ヨシ属	<i>Phragmites</i>		30	6	6	18	12
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>		24	12	6	36	6
タケ科	Bambusoideae (Bamboo)						
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	6	18	24	6	12	6
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>		6	6	6		
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>		18	36	18	12	6
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Cossinodi</i>		12	6			6
未分類等	Unknown	30	72	60	42	42	54
(海綿骨針)	Sponge			6	12	6	
プラント・オバール総数	Total	54	234	168	102	114	90

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.88	1.06	0.71		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	1.88	0.38	0.38	1.13	0.76
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.30	0.15	0.07	0.44	0.07
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	0.07	0.21	0.28	0.07	0.14
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>		0.03	0.03	0.03	
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	0.13	0.27	0.14	0.09	0.04
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Cossinodi</i>	0.04	0.02			0.02

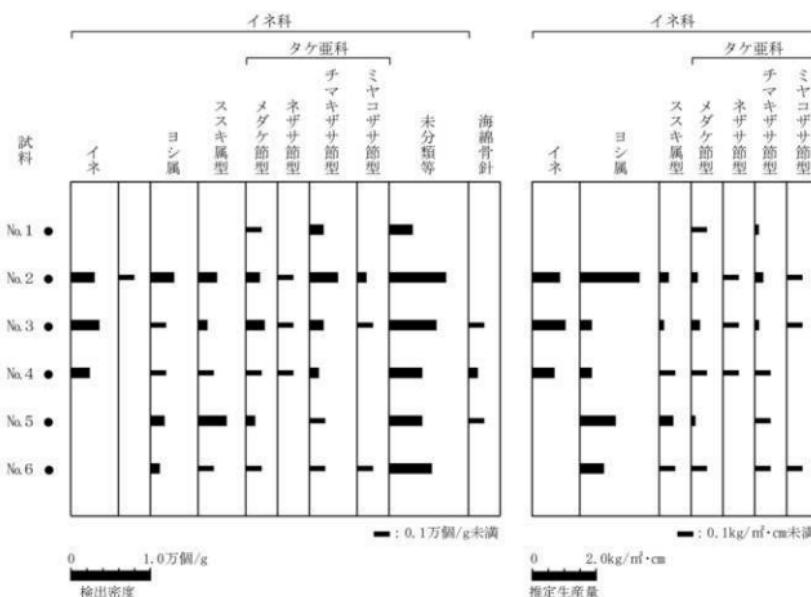
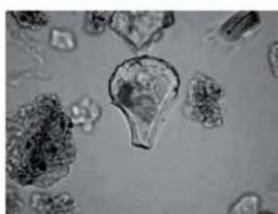


図1 新田遺跡第100次調査のプラント・オバール分析結果



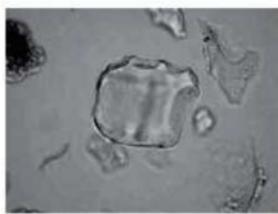
イネ (No. 2)



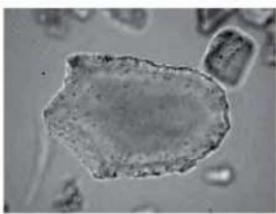
イネ (No. 3)



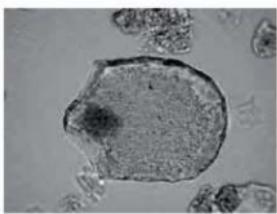
イネ (No. 4)



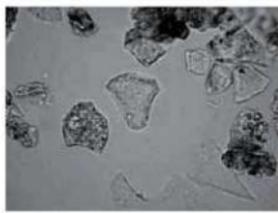
キビ族型 (No. 2)



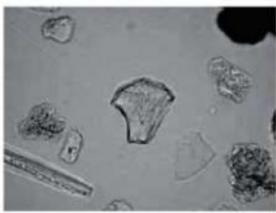
ヨシ属 (No. 2)



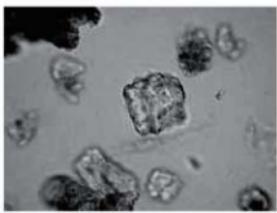
ヨシ属 (No. 5)



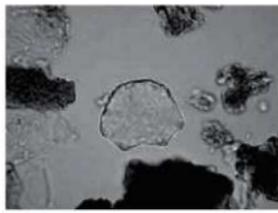
ススキ属型 (No. 2)



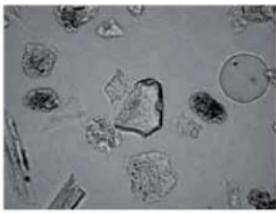
メダケ節型 (No. 3)



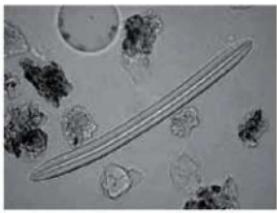
ネザサ節型 (No. 4)



チマキザサ節型 (No. 2)



ミヤコザサ節型 (No. 2)



海綿骨針 (No. 4)

— 50 μ m

附章2 新田遺跡第100次調査における放射性炭素年代（AMS測定）

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

宮城県多賀城市に所在する新田遺跡（第100次調査）の測定対象試料は、土壌3点である（表1）。層位の上下関係は、上から順に土壌サンプルIII層、IV層、VI層で、IV層は古墳時代の水田層と考えられている。

2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセット、ふるいを使い、石や根などの混入物を取り除く。
- (2) 酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用い、表1に「HCl」と記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO₂) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度 (¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度 (¹⁴C/¹²C) の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸 (HOxII) を標準試料とする。この標準試料とパックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度 (¹³C/¹²C) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と記注する。
- (2) ¹⁴C年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percen Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹³C濃度の割合である。pMCが小さい (¹³Cが少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (¹³Cの量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の14C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv.4.2較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

5 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の¹⁴C年代は、土壌サンプルIII層が 1820 ± 20 yrBP、IV層が 1790 ± 20 yrBP、VI層が 1880 ± 20 yrBP である。历年較正

年代 (1σ) は、III層が140 ~ 236cal AD、IV層が145 ~ 319cal AD、VI層が78 ~ 208cal ADの間に各々複数の範囲で示され、III層、V層は弥生時代後期頃、IV層は弥生時代後期から古墳時代前期頃に相当する（小林2009、佐原2005）。IV層は、古墳時代の水田層と考えられるのに対しておむね整合する結果と見られる。また、層位の上下関係は、年代値の前後関係に必ずしも表れておらず、3点の間の年代差は明確でない。

なお、今回測定された3点の試料が含まれる1 ~ 3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（尾寄2009、坂本2010など）。その日本版較正曲線を用いてこれらの試料の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率は、土壌サンプルIII層が1.8%、IV層が0.8%、VI層が1.0%であった。土壌の炭素含有率は多様であるが、III層はやや低く、測定された炭素の由来に若干注意を要する。

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

測定番号	試料名	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-141326	土壌サンプルIII層	土壌	HCl	-19.37 ± 0.57	1,820 ± 20	79.75 ± 0.24
IAAA-141327	土壌サンプルIV層	土壌	HCl	-18.83 ± 0.52	1,790 ± 20	79.99 ± 0.24
IAAA-141328	土壌サンプルVI層	土壌	HCl	-19.88 ± 0.44	1,880 ± 20	79.17 ± 0.24

[#6836]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-141326	1,730 ± 20	80.67 ± 0.23	1,817 ± 24	140calAD - 159calAD (15.4%)	128calAD - 252calAD (94.9%)
				166calAD - 196calAD (26.3%)	308calAD - 311calAD (0.5%)
				208calAD - 236calAD (26.5%)	
IAAA-141327	1,690 ± 20	81.01 ± 0.23	1,793 ± 24	145calAD - 150calAD (2.2%)	135calAD - 260calAD (74.7%)
				170calAD - 194calAD (12.1%)	280calAD - 325calAD (20.7%)
				211calAD - 257calAD (41.1%)	
IAAA-141328	1,790 ± 20	80.00 ± 0.23	1,876 ± 24	298calAD - 319calAD (12.8%)	74calAD - 216calAD (95.4%)
				78calAD - 140calAD (60.2%)	
				160calAD - 165calAD (2.3%)	

[参考値]

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
 小林謙一 2009 近畿地方以東の地域への拡散、西本豊弘編、新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代、雄山閣、55-82
 尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代、設楽博己、藤尾慎一郎、松木武彦編弥生時代の考古学I 弥生文化の輪郭、同成社、225-235
 Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887
 佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分、ウェルナー・シュタインハウス監修、奈良文化財研究所編集、日本の考古学 上 ドイツ展記念概説、学生社、14-19
 坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ、第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集、(株) 加速器分析研究所、85-90
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

IV 山王遺跡第143次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字西町浦地内における個人住宅新築に伴うものである。平成26年4月、地権者より当該区における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、住宅の基礎工事の際に直径40cm、長さ5mの柱状改良杭を37本打ち込むことから、埋蔵文化財への影響が懸念された。また、本地区は多賀城跡の南面に施行された方格地割の中でも、東西方向の基準となった東西大路の延長線上に位置することから、古代多賀城の様相を明らかにする上でも重要な地点であった。このため、遺跡保存の協議を行ったものの、申請どおりの工法で着手することに決定したことから、本発掘調査を実施することになった。5月29日に地権者から発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受け、6月3日より現地調査を開始した。

はじめに、重機による住宅建築部分の表土除去を行う。現表土下1.2mで硬くしまった緑灰色砂質土(II層)

を確認し、南半部では東西方向に帯状に延びる黒色粘土(SX1878)を確認した。このような黒色粘土は、多賀城南面で確認される道路跡の最上層に堆積していることが多く、当初想定したように本地区が東西大路の延長線上にあたる可能性が高くなった。5日より作業員を動員しII層上面の精査を行い、調査区中央部で幅3mにも達する溝跡(SD1879)を検出した。SX1878との位置関係から、SD1879は東西大路北側溝であると判断した。6日よりSD1879の段下げを開始するとともに、東壁際に断面観察用のサブトレーナーを設けた。この結果、SD1897には3時期の変遷があり、2時期目の埋土中に灰白色火山灰が多量に混入していることが明らかとなった。11日から全景写真撮影の準備を開始したが、II層下から染み出る水に加え、断続的に続いた雨天により、この作業に時間を要した。14日、調査区の全景写真を撮影し、その後直ちに光波測距儀による平面図測量と東壁の断面図を作成する。週明けの17日に調査器材の撤収、20・21日に重機による調査区内の埋め戻しを行い、本調査の一切を終了した。

2 調査成果

(1) 層序 (第2図)

今回の調査では、現在の表土下に3層の堆積を確認した。

I 1層：現代の造成による盛土で、厚さは0.9～1mである。調査区の南側ほど厚く堆積している。

I 2層：旧水田耕作土であり、厚さは約20cmである。

II 層：全域で確認した、非常に締りの強い緑灰色砂質土である。厚さは約25cmであり、古代の遺構検出面である。



第1図 調査区位置図

(2) 発見遺構と遺物

S X1942河川跡（第2図）

【位置・規模】II層下層のおよそ全域で確認した、東西方向の河川跡である。

【埋土】6層に細分することができる（第2図7～12）。7層はオリーブ灰色粗砂、8層は暗オリーブ灰色粗砂である。9層は暗オリーブ灰色粗砂と褐灰色粘質土の薄層が互層状に堆積している。10層は褐灰色粘質土であり、僅かに植物遺体が認められる。11層は暗オリーブ灰色粗砂、12層は褐灰色粘質土であり、いずれも炭化物が薄層状に混入している。

【遺物】出土していない。

S X1880東西大路（第2図）

【位置・規模】調査区中央から南半部で発見した、東西方向の道路跡である。位置及び規模等から、多賀城南面に施行された道路網のうち、方格地割りの基準となった東西大路であることが明らかである。長さ約6.5mを検出しており、東西とも調査区外に延びている。道路南半は調査区外であり明らかではないが、北側には素掘りの側溝が伴っている（北側溝：SD1879）。SD1879には3時期の変遷（a→c期）が認められることから、道路も同様の変遷（A→C期）があると捉えているが、時期ごとに路面を違えている状況は確認されないことから、いずれも直接II層が路面であったと考えられる。道路の規模はC期で測ると、幅員4m以上、方向は西で約10度北に偏している。以下、変遷のあるSD1879北側溝について、時期ごとに記載する。

・ SD1879 a期：b・c期に破壊されており、残存状況は悪い。

【規模】残存する規模は、上幅約90cm、深さ24cmである。

【壁・底面】残存する北辺側でみると、壁はおよそ垂直に立ち上がっている。底面は中央部がやや盛り上がりしている。

【埋土】褐灰色砂が主体であり、オリーブ黒色粘土が多量に混入している。

【出土遺物】須恵器壺・瓶・甕が出土している。

・ SD1879 b期：a期の南側に移動して構築されている。c期に破壊されており、残存状況は悪い。

【規模】残存する規模は、上幅75cm、深さ約30cmである。

【壁・底面】壁は急角度で立ち上がっているが、上端部では外に開き気味である。底面はやや起伏があり、一様ではない。

【埋土】オリーブ黒色粘土が主体であり、灰白色火山灰がブロック状に多量に混入している。

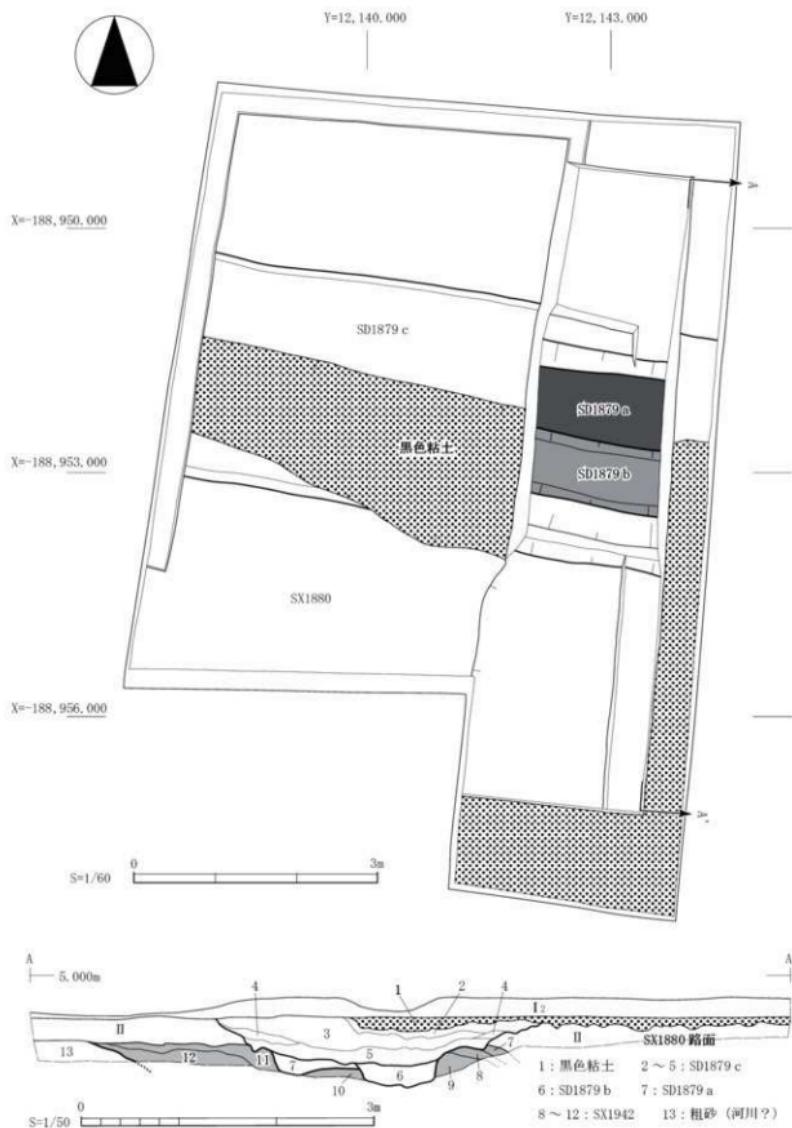
【遺物】出土していない。

・ SD1879 c期：a・b期全てを覆うように構築されている。

【規模】残存する規模は、上幅2.7～3.0m、深さ約50cmである。

【壁・底面】壁は、南辺中位に僅かな段が認められるが、緩やかに立ち上がっている。底面はやや起伏があるものの、丸く窪んでいる。

【埋土】4層に細分することができる（第2図2～5）。2層は灰色砂質土であり、黒色粘土がブロック状に混入している。3層は非常に縮りの強い褐灰色粘土である。オリーブ灰～暗オリーブ灰色砂質土や灰白色火山灰が斑状に多く混入している。4層は暗灰黄色粘質土であり、オリーブ灰色砂が斑状に多く混入している。5層は黒褐色粘土であり、灰白色火山灰が斑状に若干認められる。



第2図 遺構平面・断面図

なお、C期側溝および路面直上には黒色粘土が10～15cmの厚さで堆積している。

【遺物】土師器甕、須恵器壺・瓶が出土している。

3 まとめ

今回発見したS X1880東西大路では、S D1897北側溝で3時期の変遷（a→c期）を確認した。このうちb期埋土中には、10世紀前葉頃に降下した灰白色火山灰が二次堆積していることから、それ以降に埋没したことが明らかである。a期埋土には同様な火山灰は全く認められないことから10世紀前葉以前、最も新しいc期は10世紀前葉以降でもb期よりさらに新しい年代と捉えることができる。

ところで、多賀城南面に広がる山王・市川橋遺跡では、9世紀以降に東西・南北の道路網が設けられ、それら道路による方格地割が段階的に整備されたことが明らかとなっている。各道路は南北大路を除き周囲の地盤よりも一段掘り窪めて建設されており、多くの地点で廃絶後に窪みとして残った路面に黒色粘土が帶状に自然堆積している状況を確認している（註）。今回の調査区は方格地割外に位置しているものの、東西大路面（II層）直上及び北側溝の埋土最上層にのみ黒色粘土が帶状に堆積しているのに対して、それ以外のII層上面には全く認められないことから、地割内と同様の建設工事が行われていたと考えられる。



第3図 方格地割と第143次調査区の位置

参考文献

- 宮城県教育委員会・宮城県土木部『市川橋道路の調査一県道『泉一塙並線』関連調査報告書第一』宮城県文化財調査報告書第184集 1997
多賀城市教育委員会『市川橋遺跡一第11次調査報告書一』多賀城市文化財調査報告書第50集 1998
多賀城市教育委員会『市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書第一』多賀城市文化財調査報告書第75集 2004

註：南北大路については、東西大路との交差点付近では周囲よりも掘り窪められていたが、南北大路を横断するS X1812河川跡北側では掘り窪められている状況は確認されていない。



S X 1880 東西大路検出状況（西より）



S D 1879 北側溝断面（東壁側）

V 山王遺跡第144次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、山王字西町浦地区における個人住宅建築に伴う本発掘調査である。平成26年6月、地権者より当該区における個人住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、住宅部分の基礎工事として直径48cm、長さ6mの鋼管杭を36本打ち込むこととなっていた。本地区北側及び東側隣接地で実施した第3次調査（昭和55年）では、古墳時代～近世の遺構・遺物が発見されていることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺跡保存の協議を行ったものの、申請どおりの工法で着手することに決定したことから、本発掘調査を実施することとなった。7月25日に地権者から発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受け、7月29日より現地調査を開始した。

はじめに、重機による住宅建築部分の表土除去を行う。調査区南側では現表土下約1mで黄褐色砂質土が多量に混入する黒褐色砂質土（II層）、北側では灰オリーブ砂質土（IV層）を確認し、それら上面に溝跡や土壤等があることを確認した。30日より作業員を動員し、調査区周囲に排水及び土層観察用のサブトレーンを巡らせるとともに、平面精査を開始した。この結果、II層は近世以降の整地層であること、IV層は古代・中世の遺構検出面であることが明らかとなった。また、南半部ではII・IV層の間に黒色粘質土（III層）の堆積が認められ、この上面からも溝跡（SD1887）が掘り込まれていることを確認した。8月9日～18日までの盆休みを挟み、19日より検出した遺構埋土の掘り下げを行うとともに、並行して平面・断面図を作成したが、南半部で遺構面が複数枚介在していたことや、遺構の埋土が比較的近似していたことにより、この作業に比較的多くの時間を費やすこととなった。9月5日、調査区の全景写真を撮影し、その後一部遺構埋土の掘り下げや土層注記など補足的な調査を実施した。11・12日に調査器材を撤収し、13日に重機により調査区内の埋め戻しを行い、本調査の一切を終了した。

2 調査成果

（1）層序（第2図）

今回の調査で確認した層序は、以下の通りである。

I層：現代の盛土層及びそれ以前の水田耕作土であり、厚さは75～90cmである。

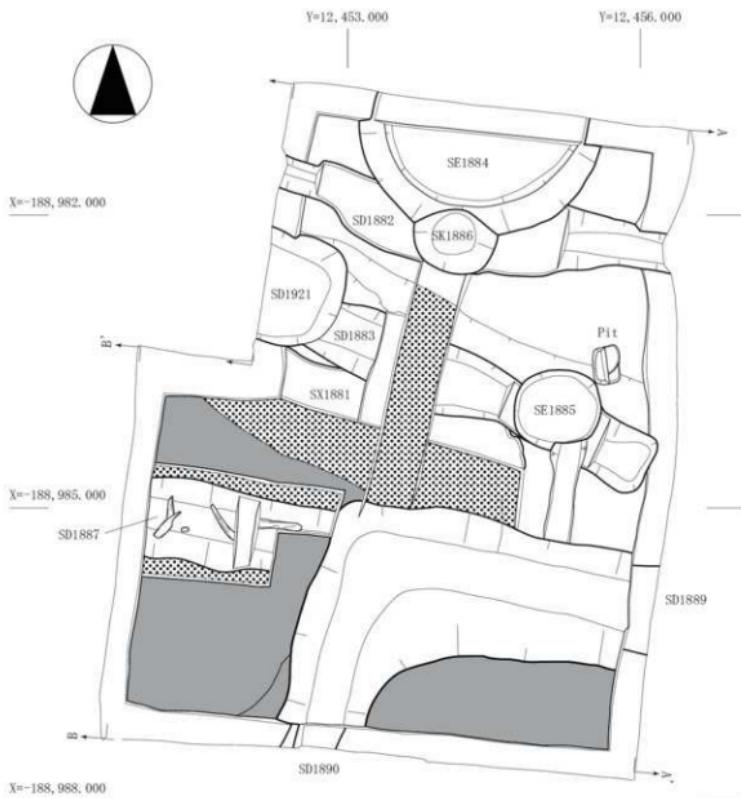
II層：黄褐色砂質土が多量に混入する黒褐色砂質土であり、厚さは最も厚い南壁部分で約30cmである。

SD1887・1888上面を覆うように施された整地層であり、近世の遺構検出面である。

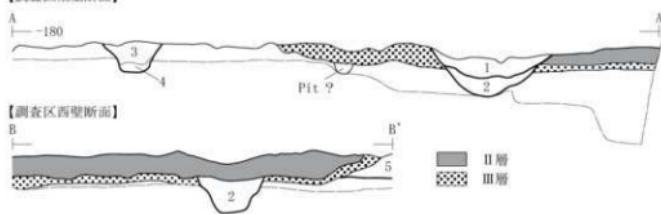
III層：黒褐色粘質土であり、厚さは5～25cmである。陶器丸碗や磁器染付碗が出土している。近世の



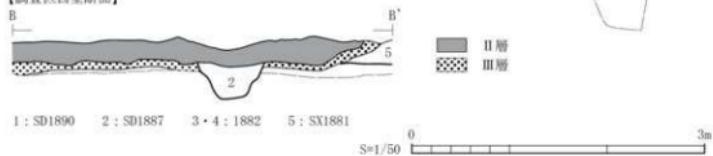
第1図 調査区位置図



【調査区東壁断面】



【調査区西壁断面】



第2図 遺構配置図

遺構検出面である。

IV層：灰オリーブ砂質土であり、厚さは80cm以上である。古墳時代中期の土器片や石製模造品が出土している。古代・中世の遺構検出面である。

（2）発見遺構と遺物

（a）IV層上面発見遺構

S D1882溝跡(第3・4図)

【位置・形態】調査区北部で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】S E1884、SK1886と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】方向は西で約12度北に偏している。規模は長さ4m以上、上幅40～65cm以上、深さ30～34cmである。

【壁・底面】壁は北辺上位部分のみ緩やかに立ち上がっているが、その他は急角度で立ち上がる。底面は凹凸が少なく概ね平らであるが、西壁付近では強く丸みを帯びて窪んでいる。

【埋土】2層に細分することができる。いずれも黒褐色粘質土が主体であり、黄褐色砂質土がブロック状に混入している。

【遺物】土師器壺（A・B II・B V類）、須恵器壺（II a類）、須恵系土器壺が出土している。

S D1883・1921溝跡(第3・4図)

【位置・形態】調査区北部で発見した、東西方向の溝跡である。西壁付近でSD1883南辺とSD1921南辺がおよそ一直線となるように接続し、一連の溝跡を形成している。

【重複】S E1885、SX1881と重複し、SE1885よりも古く、SX1881よりも新しい。

【方向・規模】方向はSD1883で測ると、西で約24度北に偏している。規模は長さ4.5m以上、上幅はSD1883が40～65cm、SD1921が1.2m、深さはSD1883が10～14cm、SD1921が50cmである。

【壁・底面】壁は、SD1883は緩やかに、SD1921はおよそ垂直に立ち上がっている。底面はともに起伏なく平坦であるが、SD1921ではより平らに成形されている。

【埋土】黒褐色砂質土が主体であり、黄褐色砂質土がブロック状に混入している。

【遺物】土師器壺（B II・B II c・B V類）、須恵器壺、須恵系土器壺が出土している。

S E1884井戸跡(第5・6図)

【位置】調査区北端部に位置しており、北半分は調査区外に広がっている。

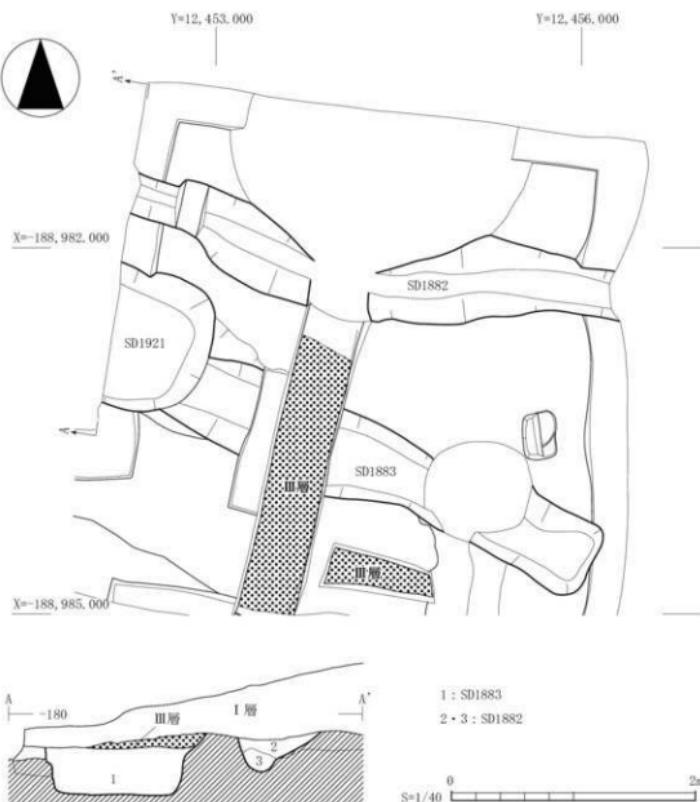
【重複】SD1882、SK1886と重複し、SD1882よりも新しく、SK1886よりも古い。

【平面形・規模】およそ円形であり、規模は直径2.5m、深さ1.2mである。

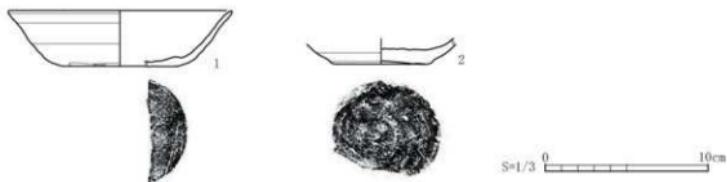
【壁】上端部がやや外に開き気味であるが、それ以下は垂直に立ち上がっている。

【埋土】7層に細分することができる。1～6層はいずれも黒色又は黒褐色の粘土・粘質土が主体である。このうち、4層には多量の木片、5層には植物遺体が混入している。7層は褐灰色砂質土、8層は黒色土であり、7層には黒色土がブロック状に混入している。

【遺物】無釉陶器壺のほか、古代の土器片が出土している。

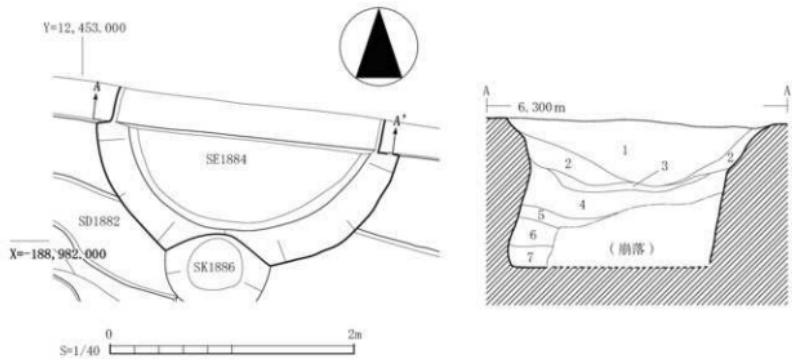


第3図 SD 1882・1883・1921 平面・断面図

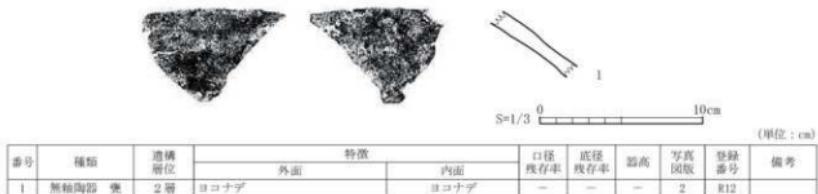


番号	種類	構造 層位	特徴		口径 底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面					
1	須恵器 环	SD1883 1層	ロクロナデ 底部：手持ちへラケズリ、ヘラ書き？	ロクロナデ	(13.6) 1/24	(7.2) 9/24	3, 4	—	R23 II類
2	須恵器 环	SD1882 1層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り→手持ちへラケズリ	ロクロナデ	—	6.0 17/24	—	—	SB IIa類

第4図 SD1882・1883 出土遺物



第5図 S E 1884 平面・断面図



第6図 S E 1884 出土遺物

S E 1885井戸跡(第7図)

【位置】調査区中央部に位置している。

【重複】SD1883と重複し、それよりも新しい。

【平面形・規模】東西にやや長い楕円形であり、規模は長径95cm、短径75cm、深さ1.3mである。

【壁】垂直に立ち上がってている。

【埋土】黒色粘土の単層であり、炭化物・木片が多量に混入している。

【遺物】無釉陶器の小片が出土している。

S K1886土壤 (第8図)

【位置】調査区北部で発見した。

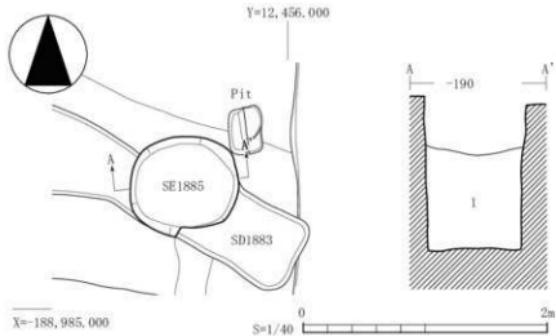
【重複】SD1882、SE1884と重複し、それらよりも新しい。

【平面形・規模】平面形はおよそ円形であり、規模は直径約90cm、深さ70cmである。

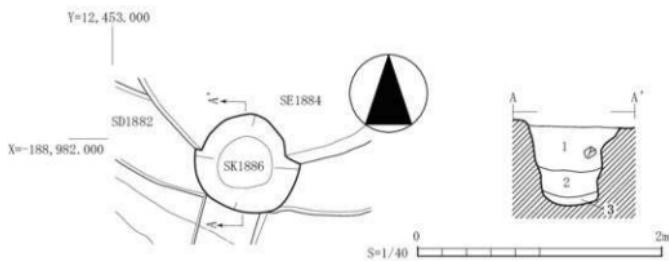
【壁・底面】壁は僅かに凹凸があり、急角度で立ち上がってている。底面は丸く窪んでいる。

【埋土】3層に細分することができる。1層は黒褐色粘質土、2層は黒色粘質土、3層は褐灰色砂質土である。1・2層には黄褐色砂質土、3層には黒色砂質土が混入しているほか、1層には僅かに灰白色火山灰の混入が認められる。

【遺物】出土していない。



第7図 S E 1885 平面・断面図



第8図 S K 1886 平面・断面図

S X 1881 (第9図)

【位置】 調査区中央部で発見した。II層上面検出のSD 1189及びIII層の堆積により上面及び南半部が破壊されており、残存状況は悪い。

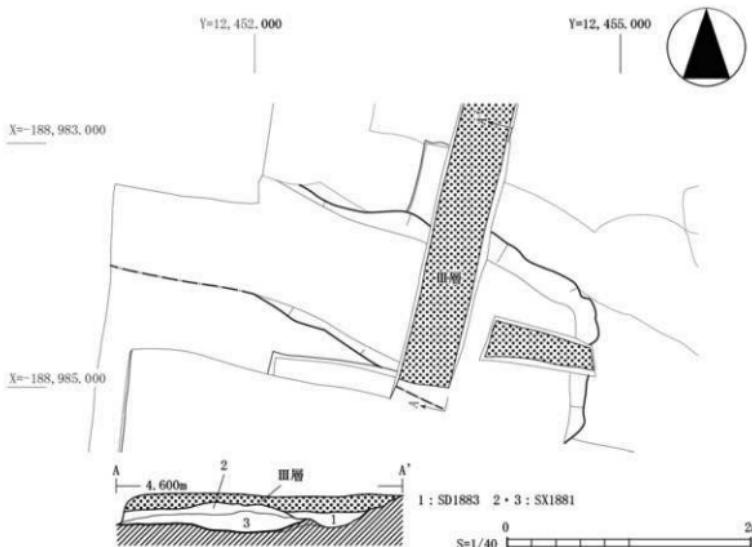
【重複】 SD 1883・1921と重複し、それらよりも古い。

【平面形・規模】 平面形は東西に長い溝状を呈し、規模は長さ4m以上、上幅1~1.4m、深さ20cmである。

【壁・底面】 壁は凹凸もなく、非常に緩やかに立ち上がっている。底面は北辺側が僅かに窪んでいるものの、およそ平坦である。

【埋土】 暗灰黄色粘質土であり、壁面に沿うように炭化物の薄層が認められる。

【遺物】 土師器甕（A・B類）が出土している。



第9図 S X 1881 平面・断面図

(b) Ⅲ層上面発見遺構

S D 1887・1888溝跡(第10・11図)

【位置・形態】調査区南部で発見した溝跡である。調査区を横断する東西方向のS D 1887と南北方向のS D 1888が直角に接続し、「T」字型の配置となっている。

【重複】他の遺構との重複はない。

【方向・規模】S D 1887で測ると、西で約11度北に偏している。規模はS D 1887が長さ5.5m以上、S D 1888が1.7m以上である。上幅は50～90cm以上、深さは26～40cmである。

【壁・底面】壁は概ね緩やかであるが、S D 1887西端付近のみ急傾斜で立ち上がっている。底面はいずれも丸みを帯びて座んでいる。S D 1887では西に向かって緩やかに低くなってしまっており、東西の比高は4cmである。

【埋土】黒褐色粘土の単層であり、木片が多数混入している。

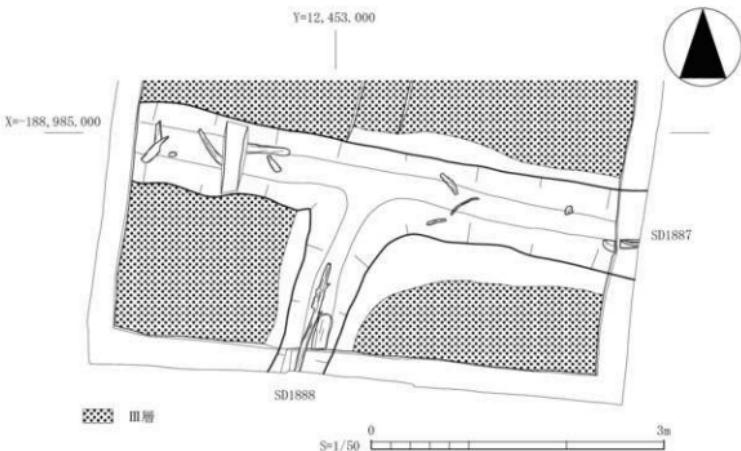
【遺物】陶器丸碗・擂鉢・仏飯器のほか、古墳時代中期の石製模造品や古代の土器片が出土している。

(d) Ⅱ層上面発見遺構

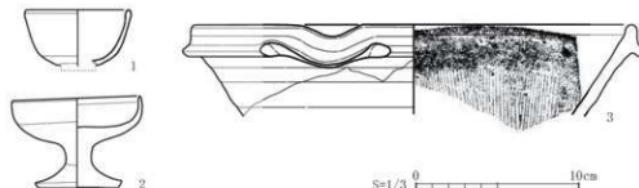
S D 1889・1890溝跡(第12図)

【位置・形態】調査区南部で発見した溝跡である。東西方向のS D 1889と南北方向のS D 1890が鉤型に接続している。

【重複】他の遺構との重複はない。



第10図 SD 1887・1888 平面図



番号	種類	造構層位	特徴		口径 底径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	陶器 丸窓	1層	口～体部：灰釉 高台：露胎？	灰釉	(6, 3) 3/24	—	—	—	R4	
2	陶器 仏瓶器	1層	口～脚中位：灰釉、脚中位～ 根部：露胎 底部：回転角切り	灰釉	7.8 18/24	4.8 24/24	5.5	4	R17	
3	陶器 插鉢	1層	ロクロナデ・鉄輪	ロクロナデ、卯目、鉄輪	(26.8) 5/24	—	—	3	R18	

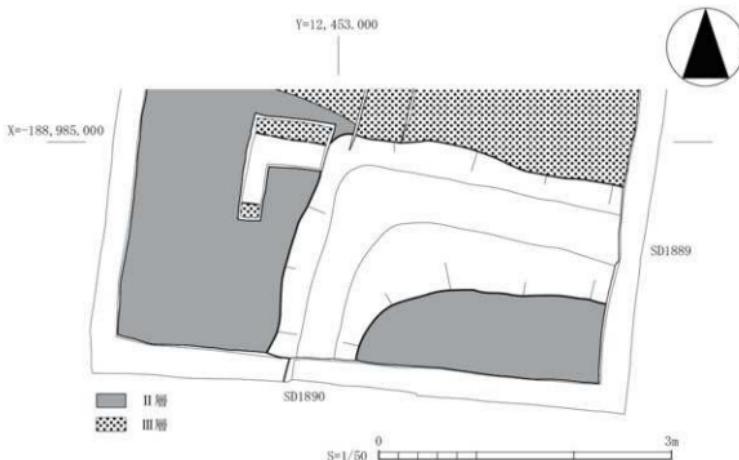
第11図 SD1887 出土遺物

【方向・規模】 SD 1889北辺で測ると、西で約11度北に偏している。規模はSD 1889が長さ3.4m以上、SD 1890が1.2m以上である。上幅は0.9～1.5m、深さは30cmである。

【壁・底面】 壁は概ね緩やかであるが、SD 1890南端付近では上端部がより緩やかに立ち上がっている。底面はいずれも丸みを帯びて窪んでいる。SD 1889では東に向かって緩やかに低くなっている、東西の比高は7cmである。

【埋土】 黒褐色粘土の単層であり、木片が多数混入している。

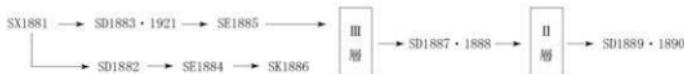
【遺物】 古墳時代中期や古代の土器片が出土している。



第12図 SD 1889・1890 平面図

3まとめ

今回の調査発見した遺構及び検出面の新旧関係をまとめると、以下のとおりである。

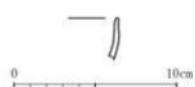


第13図 遺構変遷図

このうち、III層から陶器丸碗が出土している（第14図）。口縁部から体部にかけての破片であるが、口縁部直下が内側に僅かに括れる、いわゆる「すっぽん口」を呈するものであり、18世紀後葉頃の大堀相馬焼のものと近似している。したがって、III層上面のSD 1887・1888及びII層上面のSD 1889・1900は、いずれもそれ以降のものであることが知れる。なお、SD 1887から出土した陶器鉢は、体部に対して口縁部がやや厚く、口縁部外面に一条の突帯がめぐる片口のものであり、筋目は8状を1単位としている。器形的には18世紀後半頃とされる仙台城二の丸跡第9地点16号土壙出土遺物や、19世紀前半頃までの遺物を含む大崎市上野館跡SX 103竪穴状遺構出土遺物に類似するものが認められることから、III層の年代観ともおよそ一致するものである。

一方、IV層検出の遺構では、SD 1882・1883・1921から須恵系土器杯の小片が出土していることから、10世紀前葉以降に廃絶したものと考えられる。

SX 1881からは土師器甕B類が出土しており、8世紀後葉以降の年代が推測される。新旧関係でSD 1883・1921よりも古いことや須恵系土器



第14図 III層出土陶器碗

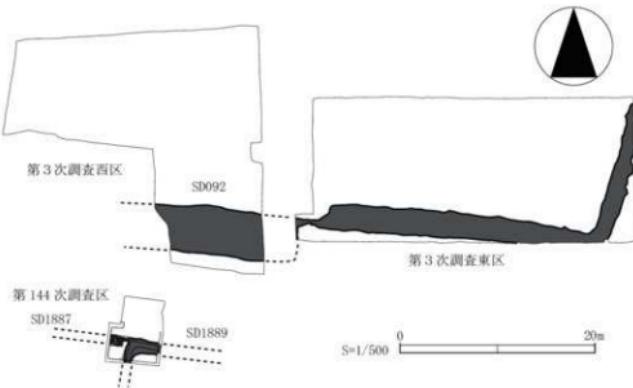
が認められないことから、9世紀代には廃絶していたものと捉えておきたい。

S E 1884からは無釉陶器甕、S E 1885からは無釉陶器の小片が出土していることから、いずれも中世のものである。採取土壤の放射性炭素年代測定の結果、S E 1884が1224～1258年、S E 1885が1167～1214年の年代が示されており、出土遺物とも矛盾しない。

S K 1886は重複関係よりS E 1884よりも新しいことから、中世以降のものである。

ところで、今回発見した遺構のうち、南半部で確認したSD 1887・1888とSD 1889・1900はⅢ層を介在しておよそ同位置で確認した溝跡であり、年代はいずれも18世紀後半もしくはそれ以降と考えられる。Ⅲ層下層のSD 1887・1888溝跡は、SD 1887東西溝の中央南側にSD 1888南北溝が接続し、T字型の配置を呈している。一方、Ⅲ層上層のSD 1889・1900溝跡は、北西部が鉤型に閉じるようにSD 1889東西溝跡とSD 1900南北溝跡が接続している。いずれも形態的に、北側の敷地との境をなすものと推測される。

さて、本調査区周辺の様子をみると、北側に近接する第3次調査東区及び西区で、18世紀以降のSD 092東西堀跡を確認している。東区で幅2.7m、西区では幅4.5mと大規模なものであり、塩竈街道沿いに設けられた屋敷の南辺を区画するものと考えられている。本調査は位置的にこの屋敷の南側に近接しており、方向や年代から判断すると、今回発見したSD 1887・1889溝跡はSD 092を意識して設けられたものと推測される。調査区の制限上、今回確認した溝跡がどのような性格のものか知ることはできなかったものの、区画溝であると仮定すれば、塩竈街道沿いに設けられた屋敷のさらに南側にも、溝で区画された何かしらの施設が存在した可能性も考えられる。



第15図 第3・100次調査検出区画溝（近世）位置関係模式図

参考文献

- 東北大理藏文化財調査研究センター『東北大理藏文化財調査年報8－仙台城二の丸跡第9地点の調査－』1997
宮城県教育委員会『上野經跡（II）－平成2年度発掘調査報告－』宮城県文化財調査報告書第143集 1991
多賀城市教育委員会『山王遺跡』『山王・高崎遺跡発掘調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第2集 1981



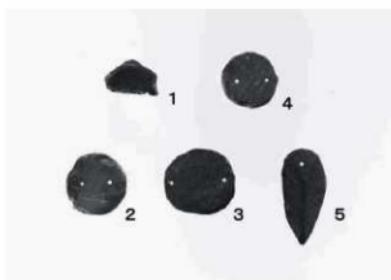
調査区全景（南西より）



S E 1884、S D 1882（北西より）



S E 1885 断面



1 石製模造品 (IV層及びSD1887出土)
1~3 IV層
4・5 SD1887



2 無釉陶器壺 第6図1 R 12



3 陶器壺鉢 第11図3 R 18



4 陶器仏飯器 第11図2 R 17

附章3 山王遺跡第144次調査における放射性炭素年代

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

宮城県多賀城市に所在する山王遺跡（第144次調査）の測定対象試料は、井戸跡から出土した木片と炭化物各1点である（表1）。

2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸 (AAA : Acid Alkali Acid) 処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1mol/l (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

3 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4 算出方法

- (1) $\delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素の ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である（表1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半滅期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 ^{14}C 年代は $\delta^{14}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も $\delta^{14}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1 標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは 2 標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{14}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によって結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13 データベース (Reimer et al. 2013) を用い、0xCalv4.2 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

5 測定結果

測定結果を表1、2に示す。

試料の¹⁴C年代は、SE1884・4層が800 ± 20yrBP、SE1885・2層が860 ± 20yrBPである。曆年較正年代(1σ)はSE1884・4層が1224～1258cal AD、SE1885・2層が1167～1214cal ADの範囲で示される。

試料の炭素含有率はいずれも50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 放射性炭素年代測定結果(δ¹³C補正值)

測定番号	試料名	試料形態	処理方法	δ ¹³ C(‰)(AMS)	δ ¹³ C補正あり	
					Libby Age(yrBP)	pMC(%)
IAAA-141324	SE1884・4層	木片	AAA	-31.06 ± 0.54	800 ± 20	90.55 ± 0.25
IAAA-141325	SE1885・2層	炭化物	AAA	-23.54 ± 0.50	860 ± 20	89.89 ± 0.27

[#6835]

表2 放射性炭素年代測定結果(δ¹³C未補正值、曆年較正用¹⁴C年代、較正年代)

測定番号	δ ¹³ C補正なし		曆年較正用(yrBP)	1σ曆年代範囲	2σ曆年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-141324	900 ± 20	89.43 ± 0.23	797 ± 22	1224calAD - 1258calAD (68.2%)	1211calAD - 1272calAD (95.4%)
IAAA-141325	830 ± 20	90.15 ± 0.25	856 ± 23	1167calAD - 1214calAD (68.2%)	1058calAD - 1064calAD (0.8%) 1069calAD - 1072calAD (0.4%) 1154calAD - 1252calAD (94.2%)

[参考値]

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(1), 337-360
 Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4), 1869-1887
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data. Radiocarbon 19(3), 355-363

VI 山王遺跡第145次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、南宮宇伊勢地内におけるJA仙台機械化センター建設に伴う試掘・確認調査である。平成26年4月、仙台農業協同組合代表理事組合長より当該区における機械化センター建築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、機械化センター建築に伴い作業室や格納庫、玄米倉庫、精米工場が建設され、いずれも基礎工事の際に直径30～35cm、長さ27mの高強度のコンクリート杭（PHC杭）を打ち込むこととなっていた。計画地北半部は遺跡外であったものの地形的に特に変化が認められないことや、計画範囲が広大であったことから、遺構の分布状況と併せて遺跡の範囲を確認するための試掘・確認調査を実施する方向で協議を進めた。なお、調査時期については、現況が水田であったことから、稲刈り終了後に行うこととした。10月15日に地権者から発掘調査に関する依頼・承諾の提出を受けたことから、10月23日より環境整備、28日より現地調査を開始した。

はじめに、計画地内に設けた12箇所の調査区（1～12区）を、南側から重機を使用し表土除去を行った。この結果、1～12区では浅黄色又はにぶい黄色褐色砂質土（V層）上面で、溝跡や土壤等を確認した。一方、北側では6～8・9区で溝跡を確認したものの閑散であり、2～4区では全く認められなかった。10月30日より作業員を動員し、各調査区の精査及び遺構検出作業を開始し、終了したものから順次写真撮影、平面・断面図作成を行った。12月に入ると雨天が続き、調査の進捗が遅れたものの、12月19日に調査器材を撤収した。年明けの1月7～10日にかけて重機による埋め戻しを行い、本調査の一切を終了した。

2 調査成果

（1）層序（第6・8図）

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。

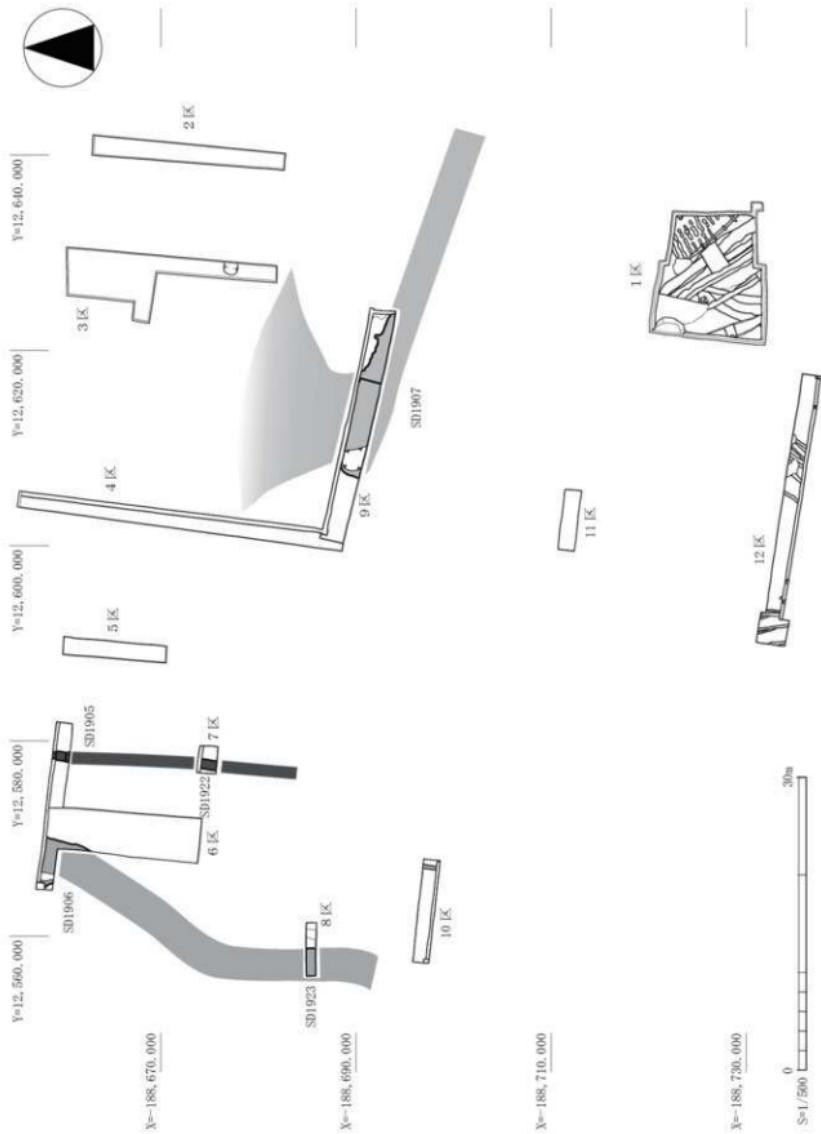
I層：現代の水田耕作土である。調査対象地の北側ほど厚く堆積しており、6区では2層に細分することができる。

II層：1・9区で確認した黄灰色又は暗黄灰色粘質土である。にぶい黄色砂質土が混入しており、1区では灰白色火山灰粒も僅か認められる。厚さは1区で6～15cm、9区で4～35cmである。1区SK1902の検出面である。

III層：13区を除くおよそ全域に堆積している褐色又はにぶい黄色粘質土である。このうち9区では灰白色火山灰が亀甲状に認められることから、上層に堆積した火山灰が乾燥してひび割れたIII層の



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

隙間に浸潤したものと考えられる。厚さは北側の5区で最大35cm、南側の1区で最大15cmである。6区SD1906の検出面である。

IV層：3・4・9区で確認した黒褐色又は暗灰黄色粘土であり、3区ではさらに3層に細分できる。にぶい黄色粘質土や灰色粘質土が若干混入している。厚さは3区で最大35cm、9区で最大30cmである。

V層：浅黄色又はにぶい黄色褐色砂質土が主体であり、古代の遺構検出面である。9区ではオリーブ灰色にグライ化している。

VI層：V層を一部掘り下げた2・5・6区で確認した、黒色粘土と灰色粘土の互層である。厚さは6区で約20cmである。

VII層：V層を一部掘り下げた2・5・6区で確認した、灰色粘土層である。厚さは5区で20cm以上である。

(2) 発見遺構と遺物

今回の調査では、1・6・7・8・9・12区で溝跡や土壤を発見した。

(a) 1区発見遺構

II層上面でSK1902土壤、IV層上面でSD1891～1898溝跡、SK1899土壤、SX1900小溝群などを発見した。以下、主な遺構について記載する。

SD1891溝跡（第4図）

【位置・形態】調査区中央で発見した、南北方向の溝跡である。

【検出面】IV層

【重複・変遷】SK1899、SX1900と重複し、SK1899よりも新しく、SX1900よりも古い。およそ同位置で3時期の変遷（A→C期）を確認した。

【方向・規模】C期で測ると方向は北で約37度西に偏している。長さ13m以上、上幅1.0～1.4cmである。

【遺物】出土していない。

SD1893溝跡（第4図）

【位置・形態】調査区西部で発見した、南北方向の溝跡である。

【検出面】IV層

【重複】SD1894～1897と重複し、SD1894よりも新しく、SD1895～1897よりも古い。

【方向・規模】湾曲しながら北で東に傾いている。規模は長さ7.5m以上、上幅0.8～1.0mである。

【遺物】出土していない。

SD1895溝跡（第3・4図）

【位置・形態】調査区西部で発見した、南北方向の溝跡である。

【検出面】IV層

【重複】SD1893と重複し、それよりも新しい。



(単位: cm)

番号	種類	遺構層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外側	内側						
I	土師器 环	1層	クロナデ 底部：回転系切り→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	—	6.4 14/24	—	—	R3	BIIc類

第3図 SD1895出土遺物

【方向・規模】方向は北で約20度西に偏している。規模は長さ7m以上である。

【遺物】土師器坏（B II c類）が出土している。

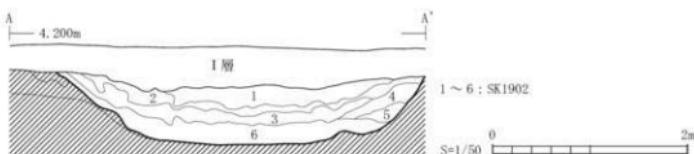
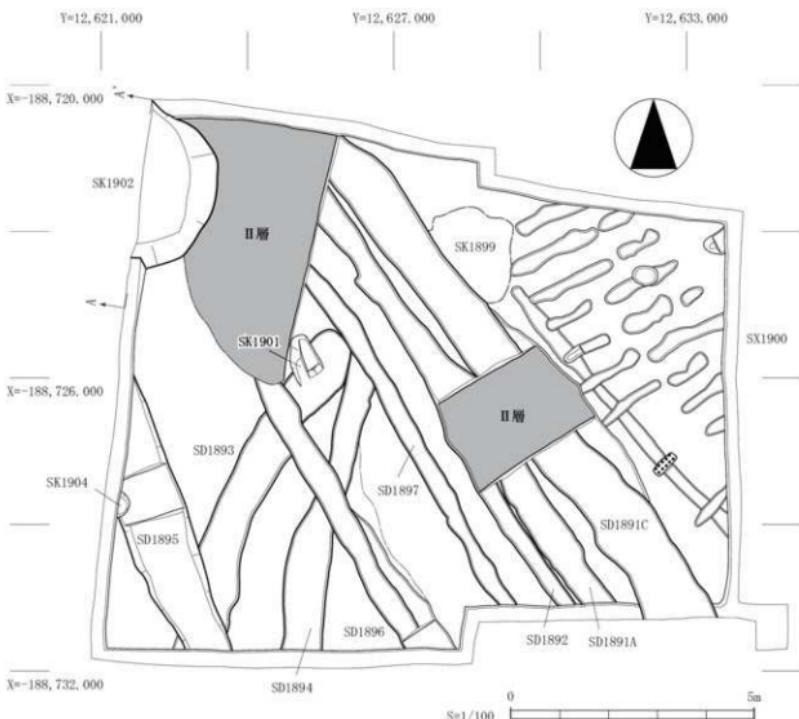
S D1896溝跡（第4図）

【位置・形態】調査区西部で発見した、南北方向の溝跡である。

【検出面】IV層

【重複】SD1893・1894・1903と重複し、それらよりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約30度西に偏している。規模は長さ8.8m以上、上幅0.4～0.6mである。



第4図 1区遺構配置図

【遺物】土師器甕（B類）、須恵器甕・高台付甕・瓶が出土している。

S D1897溝跡（第4図）

【位置・形態】調査区中央部で発見した、南北方向の溝跡である。

【検出面】IV層

【重複】S D1893・1894と重複し、それらよりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約30度西に偏している。規模は長さ8.5m以上、上幅0.25～0.4mである。

【埋土】褐灰色粘質土であり、灰白色火山灰がブロック状に多く混入している。

【遺物】土師器甕（B類）、須恵器甕が出土している。

S X1900小溝群（第4図）

【位置】調査区東部で発見した。

【検出面】IV層

【重複】S D1891A・1898、S K1899と重複し、それらよりも新しい。

【平面形・規模】長さ0.5～2.0m、上幅20～45cmの東西方向の小溝群の集合である。並行する溝同士の間隔は30～50cm、直列する溝同士の間隔は数cm～60cmである。

【埋土】III層が直接堆積している。

【遺物】出土していない。

S K1902土壤（第4図）

【位置】調査区北西部で発見した。

【検出面】II層

【重複】他の構造との重複はない。

【平面形・規模】平面形は、およそ円形と推測される。規模は西壁際で測ると、上幅は南北3.5m、深さ75cmである。

【壁・底面】壁はほとんど凹凸ではなく、緩やかに立ち上がっている。底面は僅かに起伏があるものの、丸みを帯びて座んでいる。

【埋土】6層に細分することができる。1・2層は黒色粘土であり、1層には灰黄褐色粘土が小ブロック状に混入している。3層は灰黄褐色の亜泥炭層である。4層は黒褐色粘土が混入するにぶい黄褐色砂、5層は4層が多量に混入する灰黄褐色粘土である。6層は黒褐色の亜泥炭層である。

【遺物】土師器甕（B類）、須恵器甕（III類）・高台付甕、須恵系土器甕が出土している。

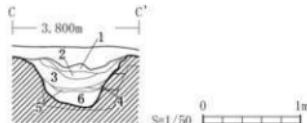
(b) 6区発見遺構

S D1905溝跡（第5・6図）

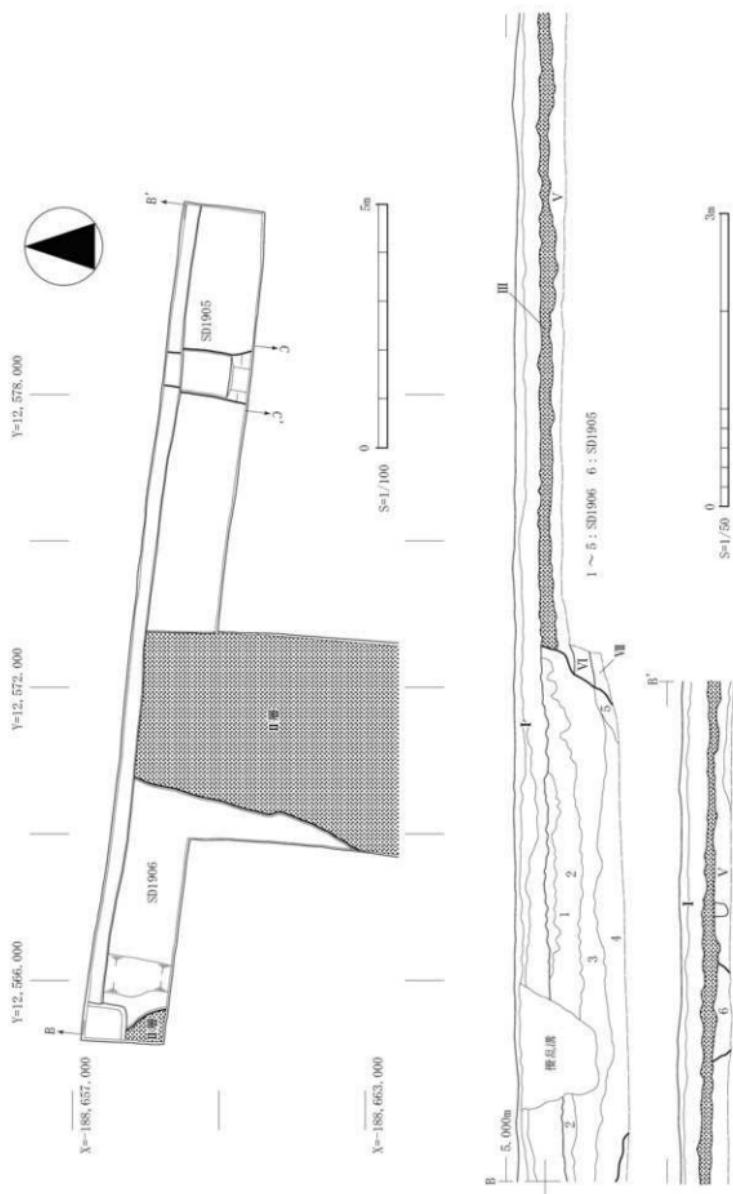
【位置・形態】東部で発見した南北方向の溝跡であり、V層上面で検出した。位置関係等から、7区 S D1922と一連のものと考えられる。

【重複】他の構造との重複はない。

【方向・規模】方向は北で約4度東に偏している。S D1922を含めた長さは、17m以上である。上幅は0.9～



第5図 7区 S D1905断面図



第6図 6区平面・断面図

1.1m、深さは調査区南壁部で測ると約50cmである。

【壁・底面】壁は凹凸がほとんどなく、急角度で立ち上がっている。底面は丸く窪んでいる。

【埋土】6層に細分することができる。1層は黒色粘土であり、にぶい黄色砂質土が僅かに混入している。2層は浅黄色砂質土であり、黄灰色粘土が斑状に混入している。3・4層は灰黄色粘土である。いずれも黒褐色粘土が混入しているが、4層により多く認められる。5層は灰黄色粘土の単層、6層は灰オリーブ粘土が多量に混入するオリーブ黒色粘土である。

【遺物】出土していない。

S D1906溝跡（第6・7図）

【位置・形態】西部で発見した南北方向の溝跡であり、III層上面で検出した。位置関係等から、8区S D1923と一連のものと考えられる。

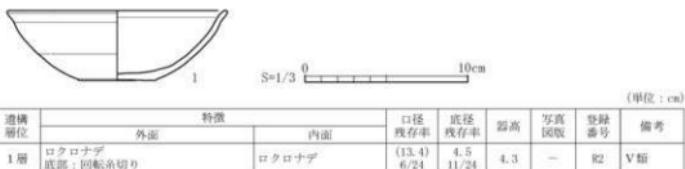
【重複】他の遺構との重複はない。

【方向・規模】蛇行しながら、北で東に傾くように延びている。SD1923を含めた長さは、30m以上である。上幅は4.5～5m、深さ80cm以上である。

【壁・底面】壁は東辺上位で僅かに段が認められるが、ほとんど凹凸なく急角度で立ち上がっている。底面は調査区が限られていたことから、確認することはできなかった。

【埋土】5層に細分することができる。1層が黒褐色粘土、2層が黒色粘土、3～5層がオリーブ黒色粘土である。2・3・4層ににぶい黄色粘土が斑状に混入しており、特に4層には多量に認められる。

【遺物】土師器壺（B類）、須恵器壺（V類）、高台付壺・瓶・甕、須恵系土器壺、丸瓦（II類）が出土している。



第7図 SD1906出土遺物

(c) 9区発見遺構

SD1907溝跡（第8図）

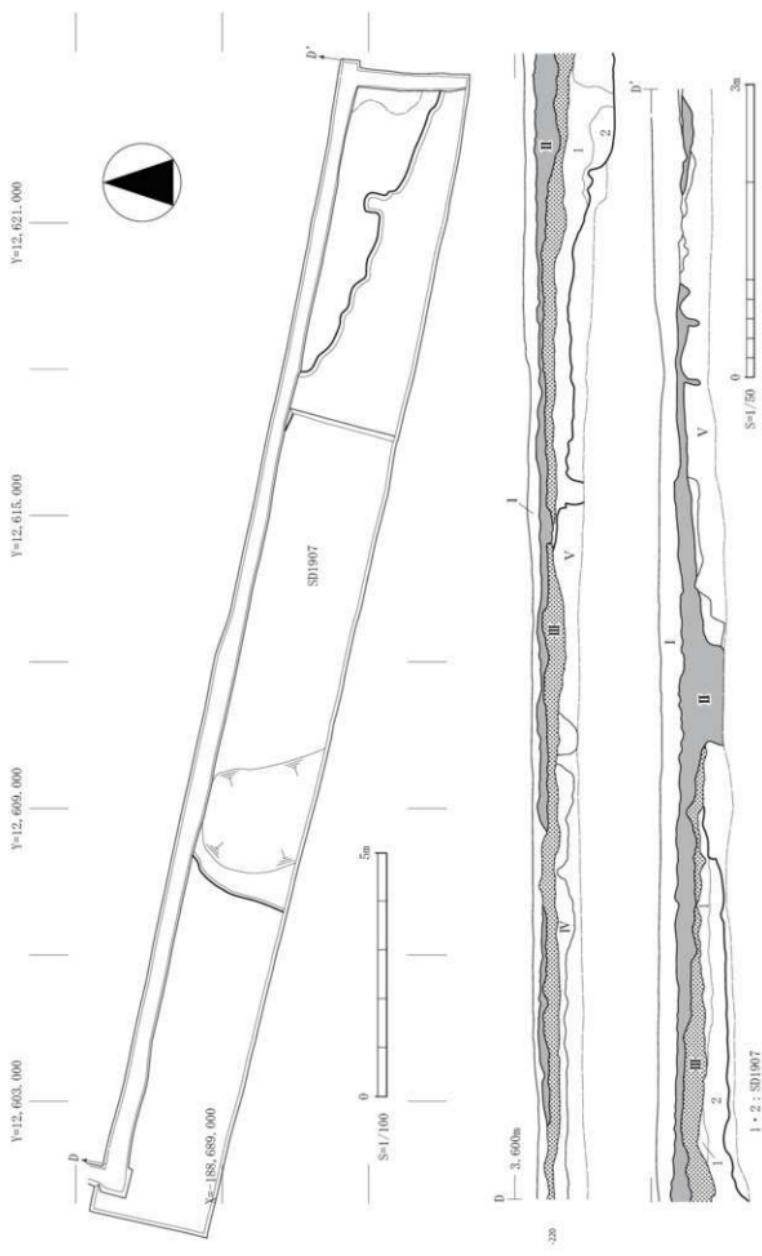
【位置・形態】中央から東部で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】他の遺構との重複はない。

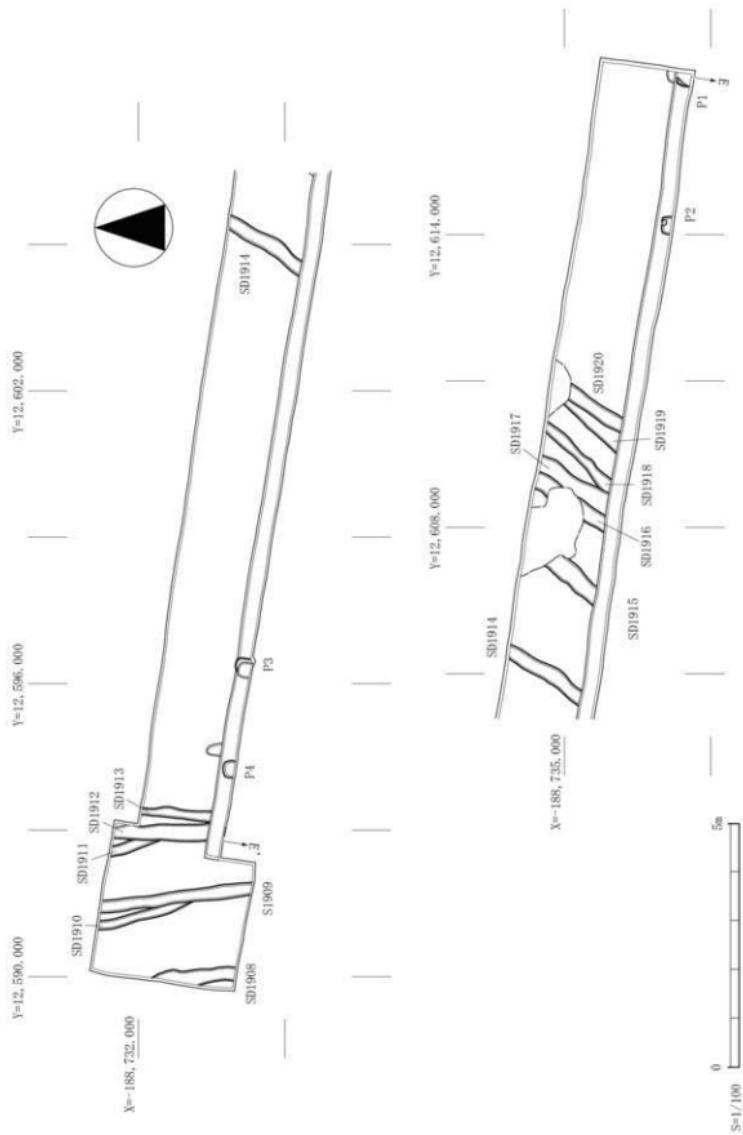
【方向・規模】方向は西で約25度北に偏している。規模は長さ17m以上、上幅1.8m以上、深さは北壁部分で測ると約60cmである。

【壁・底面】壁は上位が緩やかに、下方が急角度で立ち上がっている。底面は起伏が少なく、概ね平坦である。

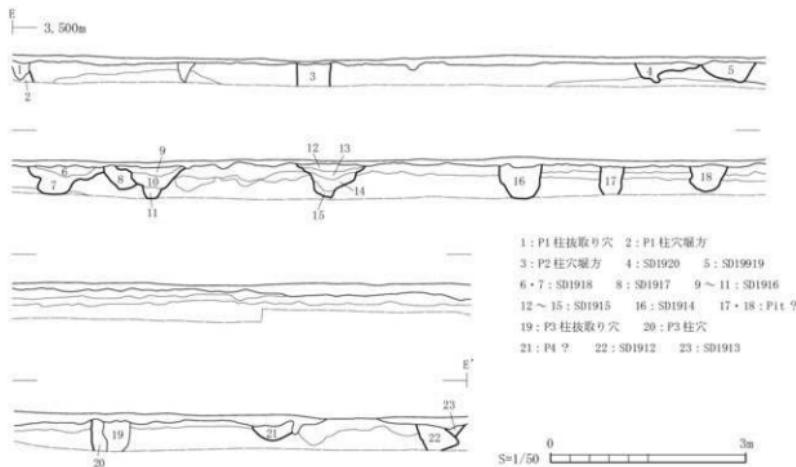
【埋土】2層に細分することができる。上層が黒褐色粘土、下層が黒色粘土であり、下層にはオリ



第8図 9区道路平面・断面図



第9图 13区道路平面图



第10図 13区南壁断面図

一帯灰色砂や灰黄色砂質土（註）が多量に混入している。

【遺物】土師器甕（A類）、須恵器高台付壺が出土している。

(d) 13区発見遺構

V層上面で、SD1908～1920溝跡を発見した。

SD1908～1913溝跡（第9図）

【位置・形態】西部で発見した、南北方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は北で7～19度西に偏している。規模は上幅18～35cm、深さは南壁部分で測ると10～25cmである。

【埋土】褐色及び黒褐色粘質土が主体であり、浅黄色砂質土が混入している。

【遺物】出土していない。

SD1914～1920溝跡（第9図）

【位置・形態】中央部で発見した、南北方向の溝跡である。

【方向・規模】方向は北で34～42度東に偏している。規模は上幅20～45cm、深さは南壁部分で測ると10～30cmである。

【壁・底面】南壁部分でみると、壁は凹凸が多く急角度で立ち上がり、底面は丸く窄まっているものが多い。

【埋土】褐色及び黒褐色粘質土が主体であり、浅黄色砂質土が混入している。また、SD1915・1920には灰白色火山灰が粒状に混入している。

【遺物】出土していない。

註：SD1907・2層に認められる灰黄色砂質土については、土質的に灰白色火山灰が変色したものである可能性も考えられたが、III層に亀甲状に認められる灰白色火山灰の状況から、これとは異なるものと理解した。

3まとめ

南側の1・12区、北側の6～9区で溝跡や土壤を発見した。

1区では南北方向の溝跡10条と、東西方向の小溝群がある。南北方向のSD1897溝跡埋土には灰白色火山灰が多量に混入しており、10世紀前葉以降に埋まつたことが明らかである。これ以外の遺構についても、出土遺物が古代のものに限られることから、およそ古代のものとしておきたい。なお、東西方向の小溝がおよそ等間隔で並行に認められるSX1900は、煙跡とされる大日北遺跡SX98小溝群と同様のものと推測される。

2～5区では亜泥炭層が堆積するのみであり、遺構を確認することはできなかった。このうち、古墳時代前期の土師器甕が出土した2区VI層は、山王・新田遺跡で広範囲に確認されている水田層と近似しているものの、調査では畦畔の高まりや耕作痕などは認められなかつた。土壤分析の結果では、イネのプラント・オパール密度は低いものの、稻作が行われた可能性が指摘されている。今後周辺で調査を行う際には、水田遺構の存在にも留意する必要があろう。

6区SD1906、8区SD1923は、位置関係や方向、規模などから一連の溝跡と考えられる。幅5mにも達する大規模なものであり、調査区外へ延びている。10世紀前葉頃に出現すると考える須恵系土器が出土していることや、中世に下るような遺物が全く認められないことから、ここではおよそ古代の範疇で捉えておきたい。

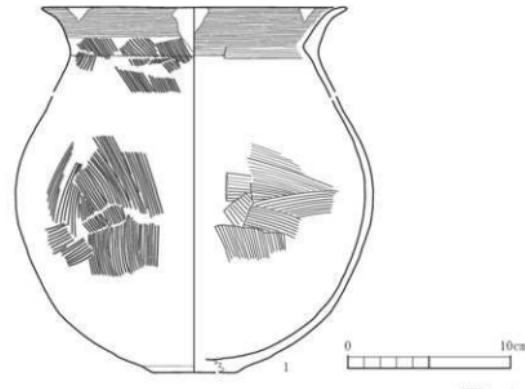
6区SD1905、7区SD1922はいずれもIII層に覆われておらず、位置関係や方向、規模などから一連の溝跡と推測される。III層については、9区の状況より10世紀前葉頃には堆積していたと考えられることから、SD1905・1922の下限はそれ以前に求めることができる。

9区SD1907は東西方向に延びる溝跡である。上面に堆積するIII層との関係より、10世紀前葉以前のものであることが明らかである。出土遺物にロクロ調整を行った土師器が認められないことを考慮すれば、8世紀中葉頃まで遡る可能性もある。

13区では、北で西に傾くSD1908～1913溝跡と北で東に傾くSD1914～1920溝跡がある。前者は調査区西側、後者は調査区東側にあり、年代もしくは場の使われ方が異なつたものと考えられる。

参考文献

多賀城市教育委員会『高崎花の木地区試掘調査—加瀬用排水路整備工事開調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第106集 2011



第11図 2区南端部VI層出土遺物

番号	種類	遺構層位	特徴		備考
			外面	内面	
1	土師器 甕	VI層	口縁部：ハケメ→ヨコナデ	口縁部：ハケメ→ヨコナデ	R5
			体部：ハケメ	体部：ハラナデ	
			口径 残存率 (18.4) 4/24	器高 (5.1) 8/24	
				写真図版	
				登録番号	



1区全景（東より）



3区北半部（南より）



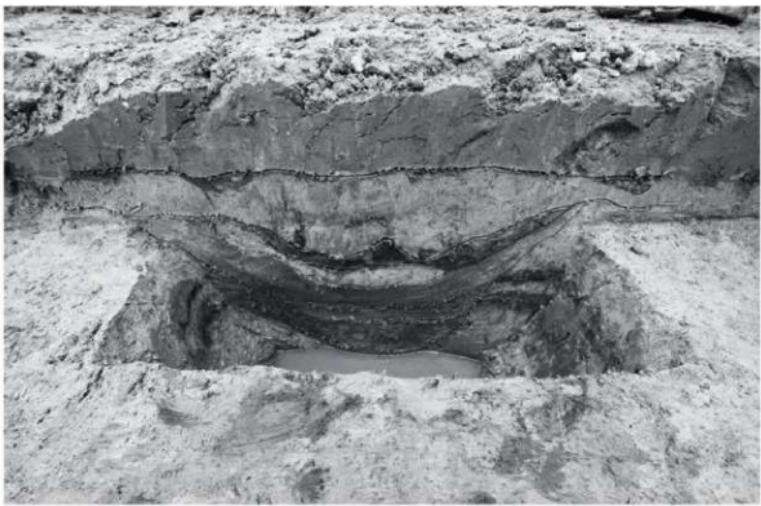
4区全景（南より）



5区全景（南より）



6区西半部（北より）



6区S D1905南断面



9区全景（東より）



13区全景（西より）

附章4 山王遺跡第145次調査におけるプラント・オパール分析

株式会社古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール（植物珪酸体）分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

本報告では、山王遺跡第145次調査2区においてプラント・オパール分析を行い、稲作の可能性について検討する。

2. 試 料

分析試料は、南1層、南2層、南3層、北1層、北2層、北3層の計6点である。なお、調査報告書順序との対応関係は、第2図のとおりである。

3. 分析方法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原, 1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに直径約40μmのガラスピーブを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパールを同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が500以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（ここでは1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-2} g ）を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。

各分類群の換算係数は、イネ（赤米）は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、スキ属（スキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山, 2000）。

4. 結 果

分析試料から検出されたプラント・オパールは、イネ、ヨシ属、スキ属、タケ亜科（メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型）および未分類である。また、プラント・オパール以外に海綿骨針も検出された。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、プラント・オパールの検出状況を記す。なお、植物種によって機動細胞珪酸体の生産量は相違するため、検出密度の評価は植物種ごとに異なる。

1) 南1層

イネ、ヨシ属、スキ属、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型および海綿骨針が検出された。ヨシ属が優占し、イネとチマキザサ節型が高い密度である。

2) 南2層

イネ、ヨシ属、スキ属、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型および海綿骨針が検出された。ヨシ属が極めて優占し、イネが高い密度である。スキ属も比較的高い密度である。

3) 南3層

ヨシ属、スキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型および海綿骨針が検出された。プラント・オバール密度は全体に低い。

4) 北1層

イネ、ヨシ属、スキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型および海綿骨針が検出された。全体にプラント・オバール密度は低い。ヨシ属が優占する。

5) 北2層

イネ、ヨシ属、スキ属型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型および海綿骨針が検出された。

ヨシ属が極めて優占する。

6) 北3層

スキ属型、メダケ節型、ネザサ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出された。全体にプラント・オバール密度は低い。

5. 山王遺跡第145次調査における稲作と推定される周辺植生・環境

稲作跡（水田跡）の検証や探査を行う場合、イネのプラント・オバールが試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。ただし、仙台平野（仙台市域、多賀城市域）では、これまでの調査で密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満でも水田遺構が検出された例が多く報告されていることから、ここでは3,000個/gを目安とする。

当該調査地では、南1層、南2層、南3層、北1層、北2層、北3層について分析を行った。その結果、南1層、南2層、北1層、北2層でイネのプラント・オバールが検出された。プラント・オバール密度は、南2層で2,400個/g、他は600～1,200個/gであり、いずれも稲作跡の可能性の目安とされる3,000個/gには達していない。ただし、南2層では直上層よりも高い密度であることから、上層から後代のプラント・オバールが混入した可能性は考えにくい。このことから、南2層では調査地において稲作が行われていた可能性が考えられる。南1層、北1層、北2層については稲作が行われていた可能性は考えられるものの、プラント・オバール密度が低いことから他所からプラント・オバールが混入した危険性も否定できない。もし稲作が行われていたならば、極めて短い期間であったか、耕作地は近傍であったと思われる。

イネ以外の分類群では、南2層と北2層でヨシ属が非常に優占している。このことから、これらの層では調査地は湿地の環境であったと考えられる。また、両層ではスキ属型が比較的高い密度であることから、調査地周辺の比較的乾燥したところにはスキ属が生育していたと推定される。

6.まとめ

山王遺跡第145次調査においてプラント・オバール分析を行い、稲作の可能性について検討した。その結果、南2層において稲作が行われていた可能性が認められた。また、南1層、北1層、北2層については調査地もしくは近傍で稲作が行われていた可能性が示唆された。なお、南2層と北2層では調査地は湿地の環境であったと推定された。また、両層では周辺の比較的乾いたところにはスキ属などが生育していたと推定された。

参考文献

- 杉山真二（1987）タケア科植物の機動細胞壁酸体、富士竹類植物園報告、31, p.79-83.
杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オバール）、考古学と植物学、同成社、p.189-213.
杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞壁酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として一、考古学と自然科学、20, p.81-92.
藤原宏志（1976）プラント・オバール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－、考古学と自然科学、9, p.15-29.
藤原宏志（1998）稲作の起源を探る、岩波新書。

表1 山王遺跡第145次調査のプラント・オバール分析結果

検出密度 (単位: × 100 個/g)

分類群(和名・学名) \ 層位		南1層	南2層	南3層	北1層	北2層	北3層
イネ科	Gramineae (Grasses)						
イネ	<i>Oryza sativa</i>	12	24	6	12		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	12	60	6	12	60	
スキ属型	<i>Miscanthus type</i>	12	30	6	6	24	12
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)						
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	6	6	6	6		24
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	18	6	18	24	6	54
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	60	12	30	6	24	12
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Cossinodi</i>	6	6	12	6	6	6
未分類等	Unknown	113	85	54	54	60	60
(海綿骨針)	Sponge	18	12	6	12	6	
プラント・オバール総数	Total	239	229	132	114	192	168

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²·cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.35	0.71	0.18	0.35
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.75	3.81	0.38	3.77
スキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.15	0.37	0.07	0.07
メダケ節型	<i>Pleioblastus sect. Nipponocalamus</i>	0.07	0.07	0.07	0.07
ネザサ節型	<i>Pleioblastus sect. Nezasa</i>	0.09	0.03	0.09	0.12
チマキザサ節型	<i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	0.45	0.09	0.23	0.05
ミヤコザサ節型	<i>Sasa sect. Cossinodi</i>	0.02	0.02	0.04	0.02

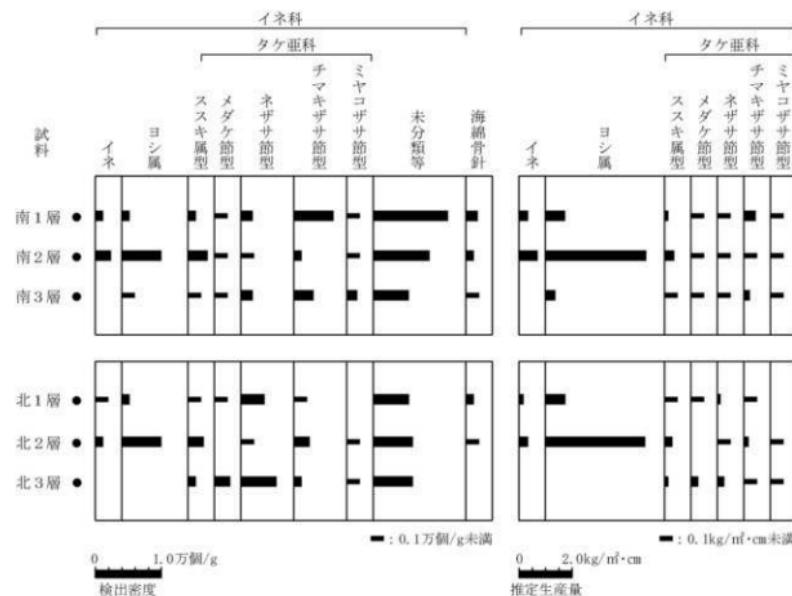
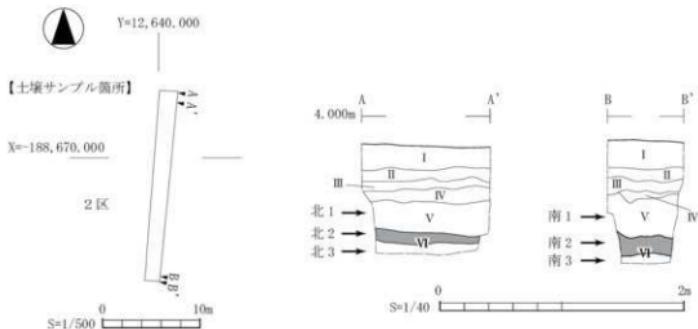
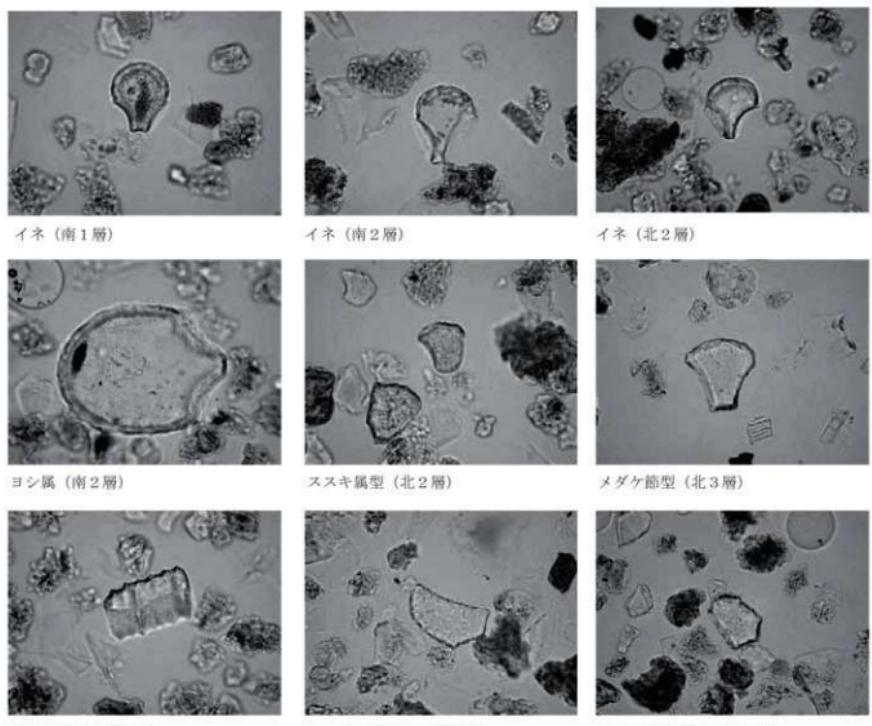


図1 山王遺跡第145次調査のプラント・オバール分析結果



第2図 山王遺跡第145次調査2区土層断面図

山王遺跡第145次調査のプラント・オパール



ネザサ節型（北3層）

チマキザサ節型（南1層）

ミヤコザサ節型（南3層）

$50 \mu\text{m}$

VII 高崎遺跡第98次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、共同住宅建築に伴う本発掘調査である。平成25年11月、地権者より当該区における共同住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、敷地内の出入り口スロープ部分以外に30～40cmの盛土を行い、その後、住宅部の基礎工事として現地表から深さ45cmの掘削を行うこととなっていた。また、敷地北側の道路からの出入り口を設ける際に40cmの掘削を行うこととなっていた。これまでの調査により、現地表から遺構検出面からの深さは35～40cmであることを確認していることから、出入り口のスロープ部分の工事の際に埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、工法変更等により遺構の保存が計れないか協議を行ったが、申請通りの工法で着手することになったことから、記録保存のための本発掘調査を実施することに決定した。その後、4月8日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて発掘調査の実施に至った。

調査は4月11日より開始し、重機を使用して現代の耕作土層(I層)を除去し、II層上面にて遺構を確認した。15日から精査を開始し、16日に遺構検出状況の検出状況の写真撮影を行った。その後、遺構実測図の作成と掘り下げを進め、18日までに図面を作成し、19日に埋め戻して全ての調査を終了した。

2 調査成果

(1) 層序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである(第2図基本層序)。

I層：現代の耕作土で、厚さは21cmである。

II層：黄褐色粘土で、厚さは18cmである。今回の調査の基盤層であり、全ての遺構の検出面である。

III層：II層に比べて白みが強い明黄褐色粘土で、厚さは16cm以上である。調査区北東隅の深掘り箇所のみで確認した。

(2) 発見遺構と遺物

S D1782溝跡(第2図)

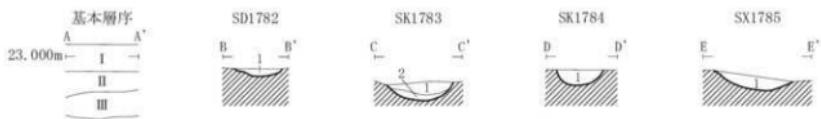
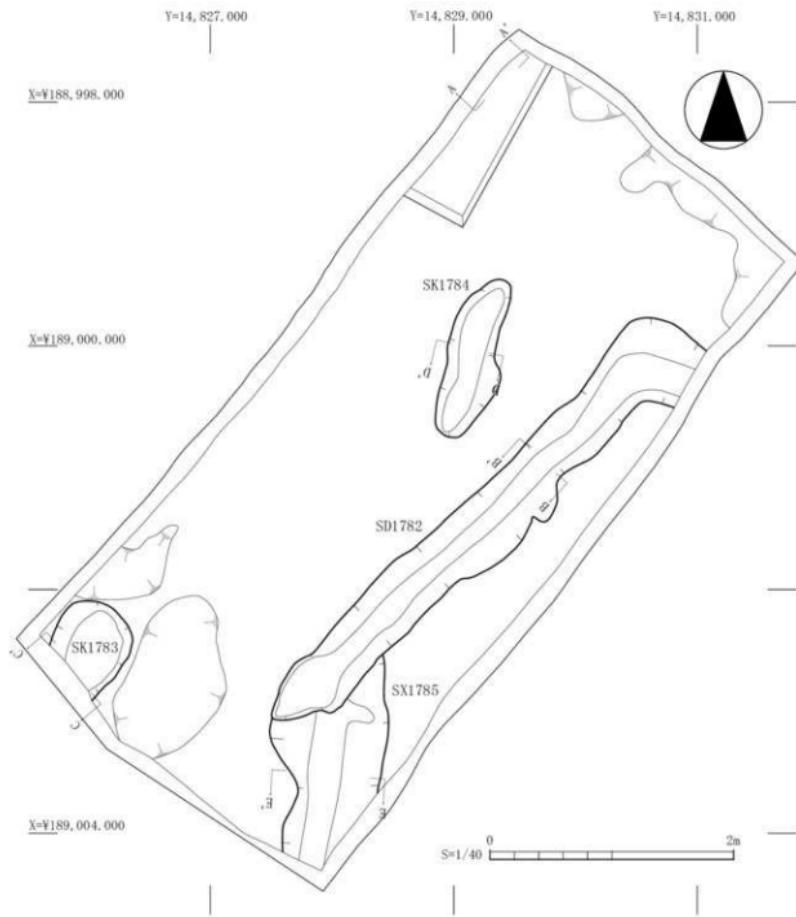
【位置】調査区東側に位置しており、東側は調査区外に延びる。

【重複】S X1785と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約47度東に傾く。規模は長さ4.6m以上、上幅は40～56cm、下幅12～40cm、深さ6cmである。



第1図 調査区位置図



第2図 遺構平面・断面図

【埋土】Ⅱ層をブロック状に含む褐色土である。

【壁・底面】壁は外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。

【遺物】埋土から土師器甕（B類）、須恵器瓶、縁軸陶器壺、平瓦の破片が出土している。

S K1783土壤(第2図)

【位置】調査区南西隅に位置している。

【重複】なし。

【平面形・規模】平面形は楕円形であり、規模は東西66cm、南北80cm以上、深さ15cmである。

【埋土】1層は暗褐色土、2層はⅡ層をブロック状に多く含む褐色土である。

【壁・底面】壁は緩やかに外反しながら立ち上がり、底面は平坦である。

【遺物】検出面から平瓦、1層から土師器壺・甕の破片が出土している。

S K1784土壤(第2図)

【位置】調査区ほぼ中央に位置している。

【重複】なし。

【平面形・規模】平面形は不整椭円形であり、規模は東西46cm、南北1.4m、深さ12cmである。

【埋土】白色粒を多量に含む明黄褐色土である。

【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がり、底面は平坦である。

【遺物】埋土から須恵器壺、丸瓦の破片が出土している。

S X1785(第2図)

【位置】調査区南隅に位置する溝状の遺構である。

【重複】SD1782と重複し、それよりも古い。

【平面形・規模】平面形は溝状であるが、調査区外に延びている部分が多く、詳細は不明である。規模は長さ1.8m以上、幅64～96cm、深さ10cmである。

【埋土】白色粒をやや多く含む黄褐色粘質土である。

【壁・底面】壁は非常に緩やかに外傾しながら立ち上がっており、底面は平坦である。

【遺物】埋土から土師器壺・甕、須恵器壺・甕・瓶、須恵系土器、平瓦・丸瓦の破片が出土している。

堆積層その他出土遺物

I層から土師器壺、須恵器甕・瓶、平瓦、磁器碗、陶器碗、近世瓦が出土している。

3 まとめ

今回の調査では、溝1条、土壤2基、性格不明遺構1基を発見した。出土遺物については、表土から近世以降の陶磁器が出土したほかは、古代の遺物が主体を占める。古代の出土破片の総数は、土師器20点、須恵器8点、須恵系土器1点、縁軸陶器1点、瓦16点であり、瓦の出土点数が多いことが指摘できる。これは、本調査区が多賀城廃寺の北東約50mに接していることが要因として考えられる。

遺構の年代について、SX1785埋土から須恵系土器の破片が出土している。このことから、SX1785と、それと重複して新しいSD1782溝跡は10世紀前葉以降のものと考えられる。



遺構検出状況（北より）



S D 1782掘り下げ状況（北より）

VIII 高崎遺跡第99次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、高崎一丁目地内における太陽光発電所建設に伴うものである。平成26年2月、地権者より当該区における太陽光発電所建設計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、発電施設を設置する際に、直径1mの杭を80cmの深さまで打ち込むことが示されていた。東側隣接地で実施した第43次調査（平成16年）では、表土下10cmで遺構を確認していることから、遺跡に与える影響が懸念された。このため、本发掘調査にかかる事業量を積算するための試掘・確認調査を実施することで協議を進め、4月9日に依頼・承諾の提出を受け、4月15日より現地調査を開始した。

はじめに、対象区の北東部（1区）で重機による表土除去を行ったところ、現表土下に1m以上の盛土が施されていることが明らかとなつた。その後、5箇所（2～6区）で同様に掘削した結果、対象区全域に厚い盛土が認められ、建設工事の際にも掘削は及ばないことが明らかとなつた。このため、直ちに各調査区の写真撮影及び簡易な位置図を作成した。翌16日に埋め戻しを行い、本調査の一切を終了した。

2 調査成果

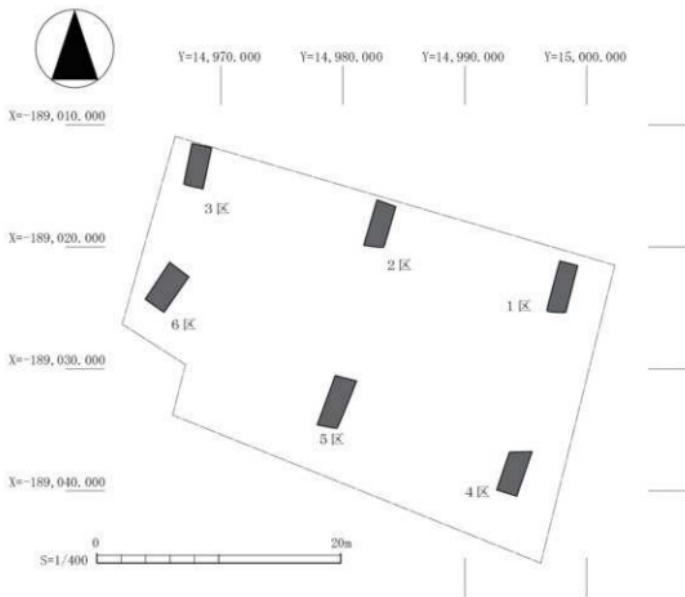
今回の調査では、掘削範囲が全て盛土内に収まることが明らかとなつたため、それ以上の掘削は行わなかつた。このため、遺構・遺物は全く発見できなかつた。

参考文献

多賀城市教育委員会「III. 高崎遺跡第43次調査」『市川橋遺跡ほか一市川橋遺跡第47次調査・高崎遺跡第43次調査・八幡沖遺跡第4次調査一』多賀城市文化財調査報告書第80集 2005



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



調査区遠景（北西より）



1区全景（南より）



5区全景（北より）



2区東壁断面

IX 高崎遺跡第100次調査

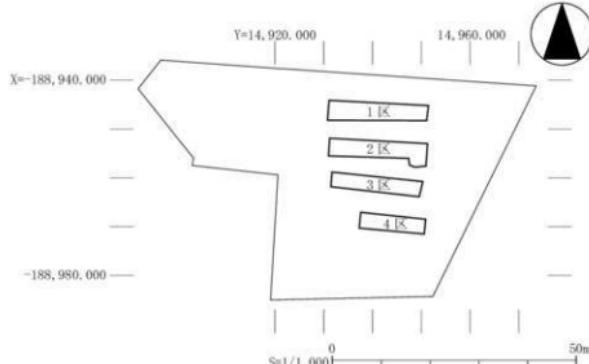
1. 調査に至る経緯と経過

本件は、太陽光発電所設置に伴う確認調査である。平成26年9月、地権者より当該区における太陽光発電所設置と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、設置の際に直径76mmの基礎杭84本を1.1mの深さまで打ち込み、また、施設の周囲にフェンスを巡らすために直径80mmの鋼管支柱65本を45cmの深さまで打ち込むこととなっていた。本調査区の南東側近接地の調査成果では、地表面から遺構検出面までの深さは約10cmであることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、遺構の分布と密度を確認するための調査を実施することに決定した。その後、10月15日に地権者から調査に関する依頼・承諾書の提出を受けて確認調査を実施した。

調査は10月21日から開始し、太陽光パネル設置箇所に1～4区のトレーンチを設定し、24日までかけて重機で表土の除去を行った。その結果1～3区のIII層上面より遺構を発見し、4区には遺構がないことを確認した。28日から遺構検出作業を行い、11月14日と15日に遺構検出状況の写真撮影を行った。18日からSI1770、SE1775、SI1780の掘り下げを進め、19日からは各調査区の図面作成を開始



第1図 調査区位置図



第2図 調査範囲と調査区配置図

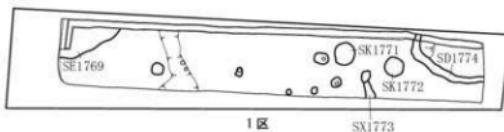
した。20日にSE1775、27日にSI1780、28日にSI1770の掘り下げ状況の写真撮影を行い、引き続き遺構の精査・記録を進めた。30日から12月3日まで埋め戻しを行い、4日にフェンスの撤去を行い全ての作業を終了した。



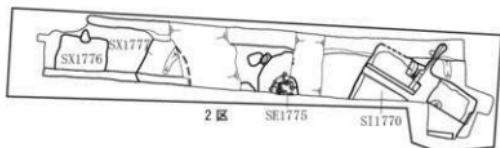
Y=14, 930, 000

Y=14, 940, 000

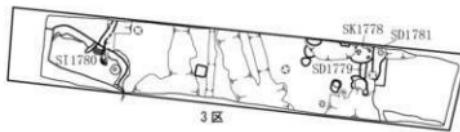
Y=14, 950, 000



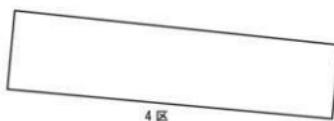
X=-188, 950, 000 ——



X=-188, 960, 000 ——

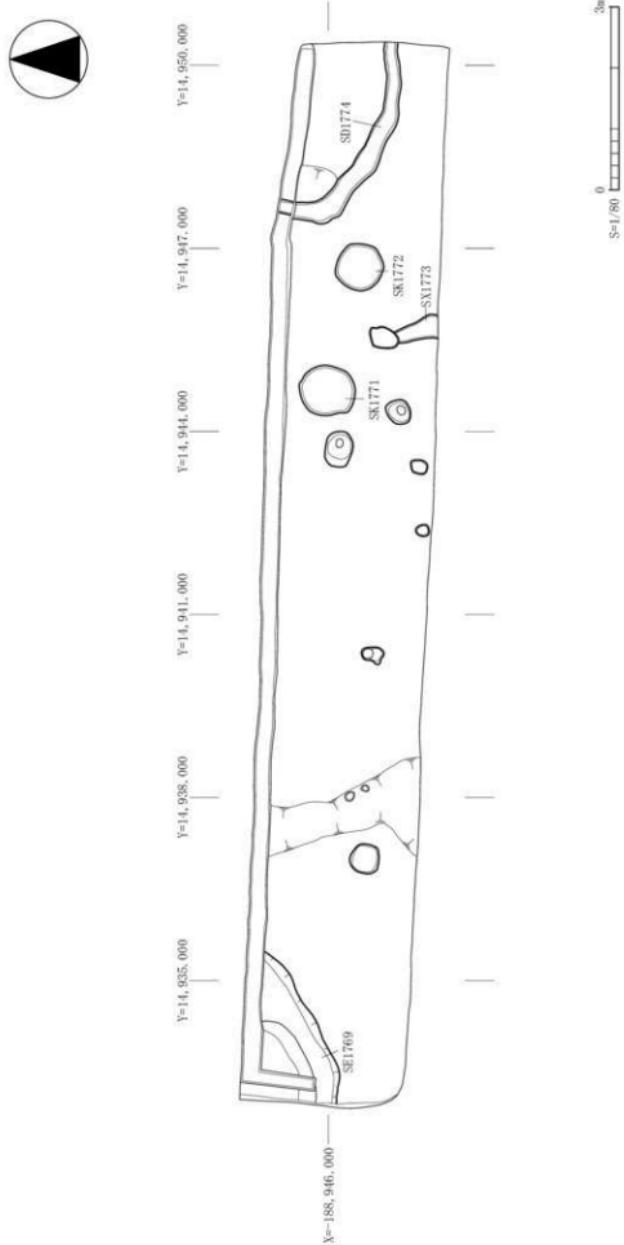


X=-188, 970, 000 ——



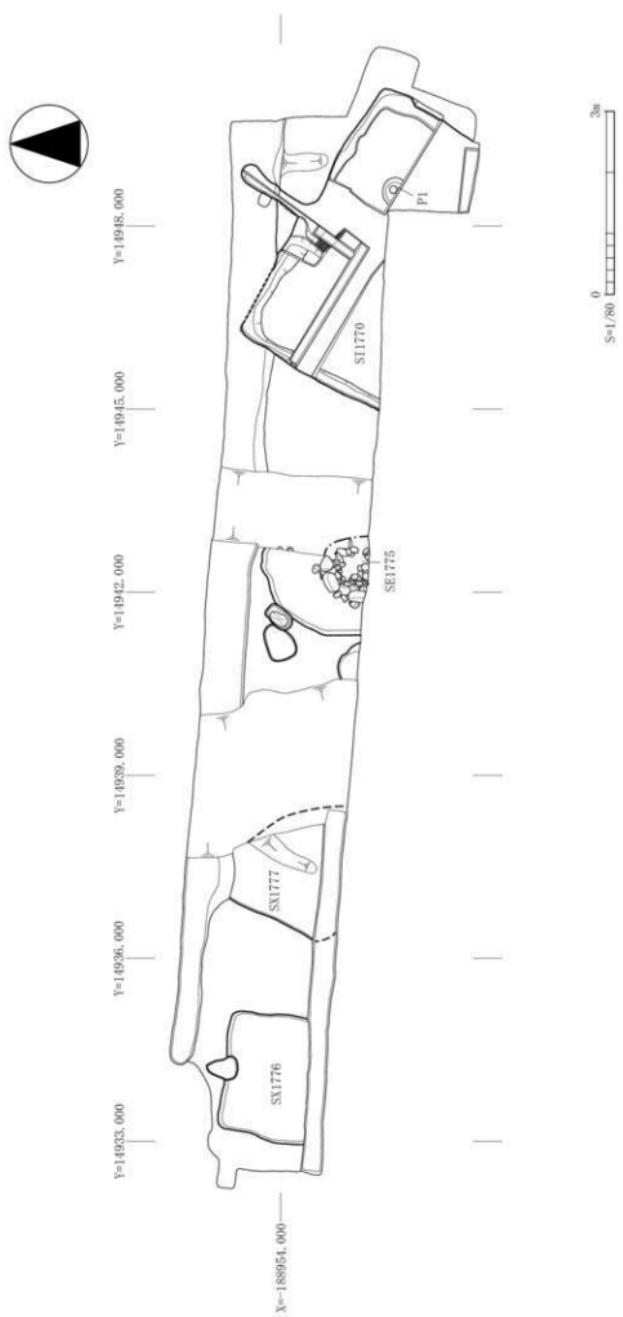
0
S=1/200 10m

第3図 検出造構全体図

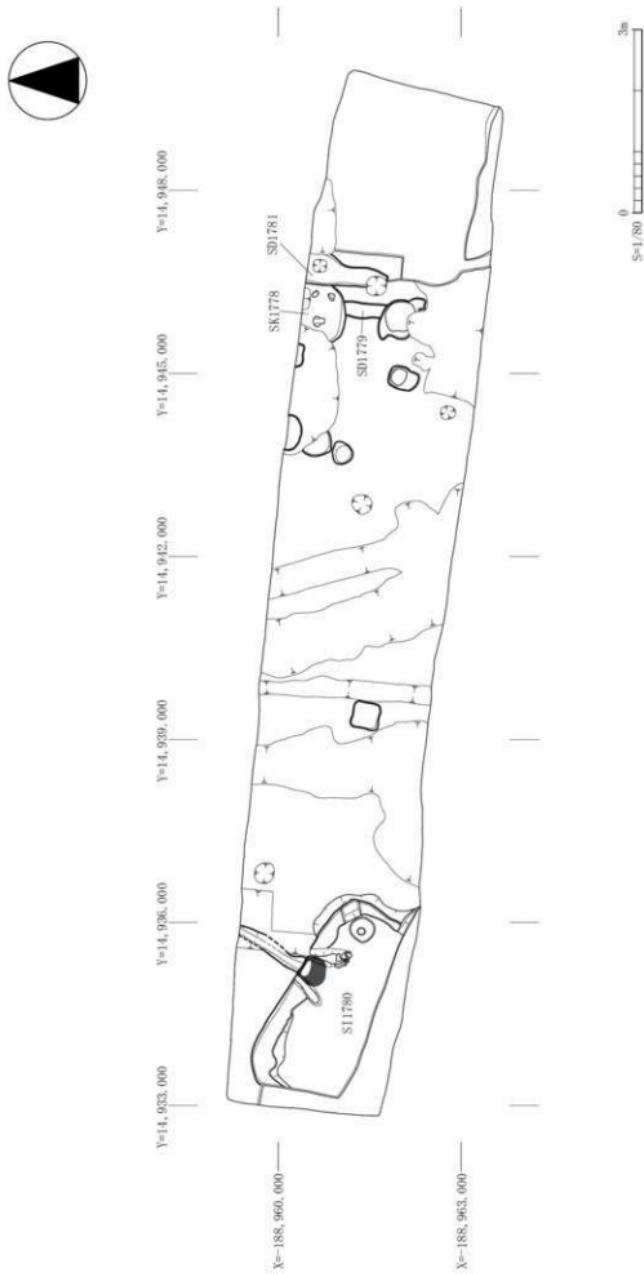


第4図 1区検出道路平面図

第5図 2区検出遺構平面図



第6圖 3區檢出遺構平面圖



2 調査成果

(1)層序

今回の調査区で確認した層序は以下の通りである。

I層：調査区全域に堆積する現代の盛土で、厚さは1.2m程である。

II層：1区と2区の東側に堆積する褐色粘質土で、厚さは15cm程である。

III層：基盤となる明黄褐色粘土で、今調査区の遺構検出面である。

(2)発見遺構と遺物

今回の調査では、竪穴住居跡2軒、井戸跡2基、溝跡3条、土壙3基、柱穴20基、性格不明遺構3基を発見した。遺構検出面は全てIII層である。以下、竪穴住居について記載したのち、調査区ごとに発掘した遺構の概要について示す。

S I 1770竪穴住居跡(第7・8図)

【位置】2区東側で発見した方形の竪穴住居跡である。

【残存状態】北西隅と煙道の一部は後世のカクランで壊されているが、それ以外の箇所は良好である。また南半部は調査区外である。

【重複】煙道付近のピットと重複し、それよりも新しい。

【平面形・方向】平面形は方形である。方向は西辺でみると北で約31度東に偏している。

【規模】北辺が4.6m、西辺が2.6m以上である。北辺の長さから東辺や西辺も4.6m程になると考えられる。

【埋土】1層にはぶい黄褐色土である。2層は1層と同じにぶい黄褐色土であるが、1層よりも粘質で鉄分が多く含んでおり、カマド崩落土よりも後に堆積している。どちらの層もほぼ均質な土であるため、自然堆積した土と考えられる。

【床面の状態】床面の凹凸を平坦になるように黒褐色粘質土をブロック状に多く含む黄褐色土で貼床が施されている。貼り床の厚さは6～11cmある。

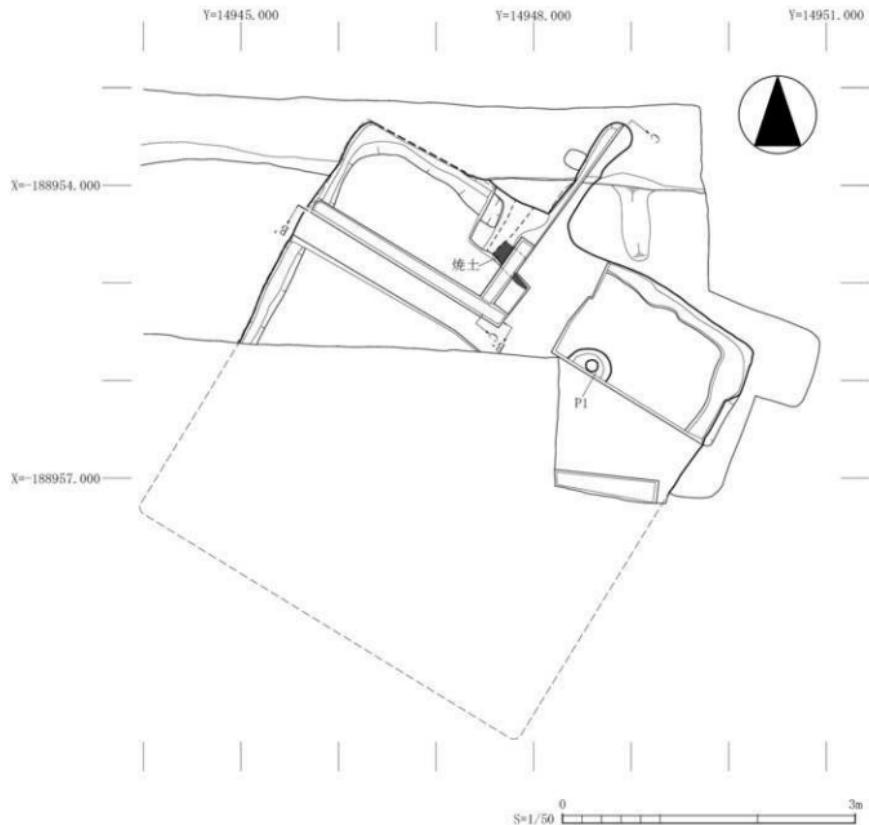
【壁の状態】ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は西壁で34cmである。また周溝の底面から19cmの高さまでは、4cm程外側にオーバーハングしている。

【柱穴】柱穴を1基確認した(P 1)。平面形は円形であり、規模は直径46cmである。掘方埋土は貼床の土と同じ黄褐色土をブロック状に少し含む黄灰色粘質土である。柱抜取り穴は直径13cmの円形である。柱抜取り穴の埋土は掘方埋土と同じだが、貼床の土と同じ黄褐色土ブロックを含まない点が異なる。

【カマド】北辺中央に付設され、煙道・燃焼部・側壁を確認した。規模は燃焼部幅37cm以上、奥行は掘り下げの際に掘りぬいてしまったため、断面で確認できた範囲では22cmである。側壁はIII層よりも暗くすんだ明黄褐色土で構築されており、側壁内側が被熱している。カマド内に確認できた4層は、III層ブロックを含むにぶい黄褐色土で炭化物と焼土を含むことから、カマド崩落土と考えられる。

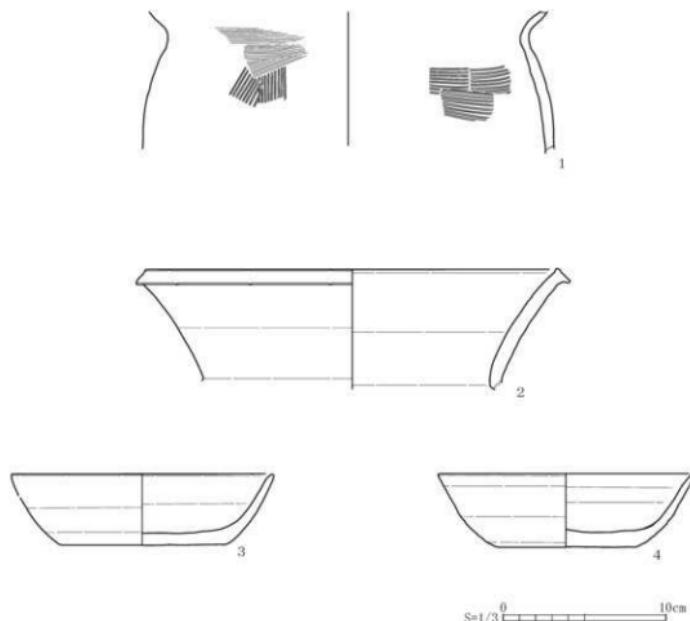
煙道は長さ1.3m、最大幅32cm、深さ11～22cmであり、先端ほど深くなる。煙道の天井の一部が残存し、内側は被熱している。煙道内埋土の3層はにぶい黄褐色土で、炭化物と焼土を含んでおり、煙道崩落土と考えられる。

【周溝】検出した壁面全てで確認できる。規模は上幅17～34cm、下幅3～24cm、深さ19cmであり、住居内埋土の1層及び2層が堆積している。



第7図 S11770竪穴住居跡平面・断面図

【遺物】1層からは土師器坏（B類）・甕（A・B類）（第8図-1）や須恵器坏（II類）・甕（第8図-2）・壺・瓶・丸瓦（IA類・IA類-a）、平瓦（IIB類）が出土している。その中でも土師器甕（B類）が最も多く出土し、そのほかの遺物は少数である。2層からは土師器坏（A類・AI類・AI類-b）・甕（A・B類）や須恵器坏（I類・II類）（第8図-3・4）・甕・壺・平瓦（IA類・IA類-a）が出土している。



(単位: cm)

番号	種類	遺構 層位	特徴		口径 現存率	底径 現存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	土師器 甕	S I 1770 理土1層	ハケメ	ハケメ	—	—	—	—	R13	B類
2	須恵器 甕	S I 1770 理土1層	ロクロナデ	ロクロナデ	25.2 13/24	—	—	6-1	R14	
3	須恵器 坏	S I 1770 理土2層	ロクロナデ 底部: 手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	16.0 8/24	10.2 17/24	4.4	6-2	R11	II類
4	須恵器 坏	S I 1770 理土2層	ロクロナデ 底部: 回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(15.6) 3/24	8.4 24/24	4.5	6-3	R12	I類

第8図 S I 1770出土遺物

S I 1780堅穴住居跡(第9~13図)

【位置】3区西側で発見した隅丸方形の堅穴住居跡である。

【残存状態】北辺の一部及び煙道の一部が後世のカクランで壊されているが、それ以外の箇所では残存状態は良好である。また南半部は調査区外である。

【平面形・方向】平面形は隅丸方形である。方向は東辺でみると北で約27度東に偏している。

【規模】北辺が3m、東辺が1m以上である。北辺の長さから東辺や西辺も3m程になると考えられる。

【埋土】5層の堆積を確認できた。(第9図1・4・5・6・7) 1層は黄褐色土をブロック状に少量含む褐色土である。4層はⅢ層の粘土をブロック状にやや多く含む褐色粘質土である。5層は黄褐色粘質土でⅢ層に似た土である。6層は炭化物を若干含んだ褐色土で、東壁際に堆積している。7層は黄褐色土でⅢ層よりも色調がややすくすんでいる。

【床面の状態】Ⅲ層を平坦にして床としている。

【壁の状態】床面からほぼ垂直に立ち上がる。また北東隅の周溝の一部は4cm程外側にオーバーハングしている。

【柱穴】床面上で1基確認した(P1)。平面形は円形である。抜取り穴のみが確認できた。規模は直径42cmであり、埋土は炭化物や焼土を含む暗褐色土である。

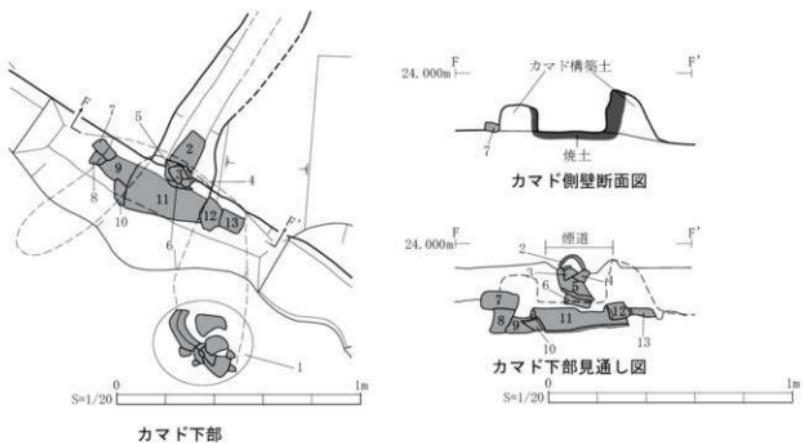
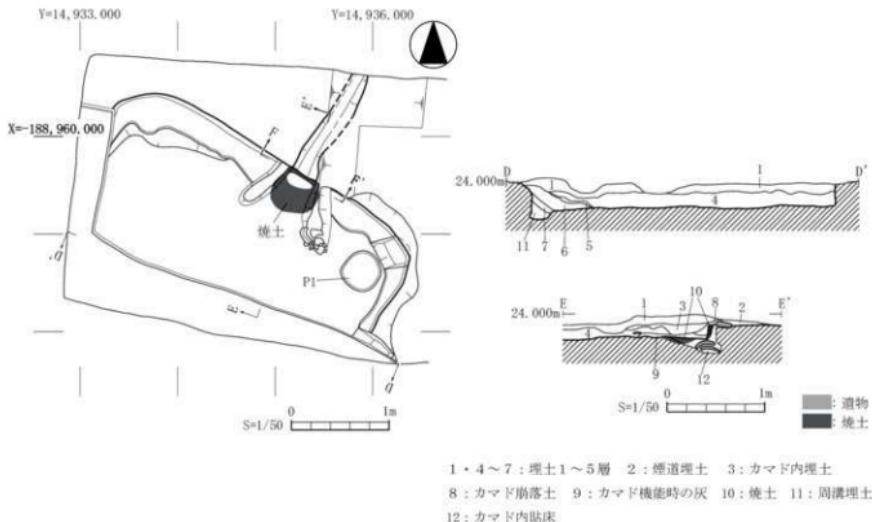
【カマド】北辺中央よりやや東寄りに付設され、煙道と燃焼部と側壁を確認した。規模は燃焼部最大幅39cm、奥行40cmで、燃焼部の奥壁付近では被熱していない箇所が確認できた。残存する側壁高は最大17cmである。側壁部は暗褐色土をブロック状にやや含む黄褐色粘質土でⅢ層と近似した土で構築されており、側壁内側の一部と燃焼部の貼床が被熱している。カマド内に堆積する3層は炭化物や焼土をやや含むにぶい黄褐色土である。8層は黄褐色粘質土でⅢ層に近似した土だが色調が若干くすんでおり、きめが粗い土を全体的に含む。堆積の状況からカマド崩落土と考えられる。9層はきめが細かく、しまりがないことや、焼土の直上に堆積していることから、カマド機能時の灰と考えられる。

煙道は長さ1.2m以上、最大幅28cm、深さ7cmである。煙道入口には丸瓦が伏せた状態で敷かれている。煙道内埋土の2層は暗赤褐色の焼土をブロック状に非常に多く含む褐色土である。

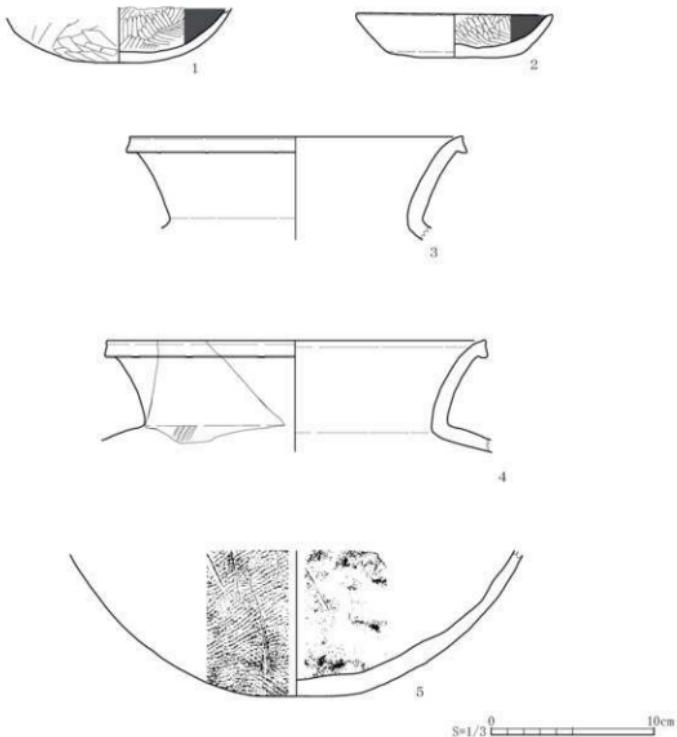
【周溝】検出した壁面全てで確認できる。上幅10~41cm、下幅18~24cm、深さ38cmである。周溝埋土である11層はⅢ層の土をブロック状に多く含む褐色土である。カマド構築土が11層を覆う。

【その他の施設】カマド下部は、周溝に平瓦と丸瓦を伏せた状態で敷き暗渠状になっている。燃焼部の奥壁には瓦や須恵器が貼りつけられていた(第9図)。カマド周辺は須恵器や瓦を据えるために掘りくぼめられており、須恵器や瓦を据えた後に全体を整えるために貼り土が施されている。12層は11層と同じⅢ層の土をブロック状に多く含む褐色土で全体を整えるために施された貼り土である。

【遺物】1層からは土師器壺・甕・高台付壺、須恵器壺・甕・壺が出土している。2層からは丸瓦(I A類)(第12図-1)が出土している。3層からは土師器壺(B II類)・甕(A類・B類)、須恵器甕・壺、丸瓦(II類・II B類-a)が出土している。4層からは土師器壺(A III類・B類・B II類)(第10図-2)・甕(A・B類)、須恵器壺・甕・壺、丸瓦(II類・II B類)、平瓦(I A類-a)が出土している。6層からは土師器壺・甕(A・B類)、須恵器甕・瓶、丸瓦(II B類-a 1)が出土している。8層からは土師器壺(A I類-b)(第10図-1)が出土している。11層からは土師器甕(B類)が出土している。カマド構築土からは土師器甕(A類)、丸瓦(II B類-a)(第11図-1)が出土している。12層からは土師器甕(A類)、丸瓦(I A類・II B類-a)(第11図-2)、平瓦(I A類-a・II B類-a 1)(第13図-1・2)が出土している。なお、I A類の丸瓦は2層出土の丸瓦と同一のものである。



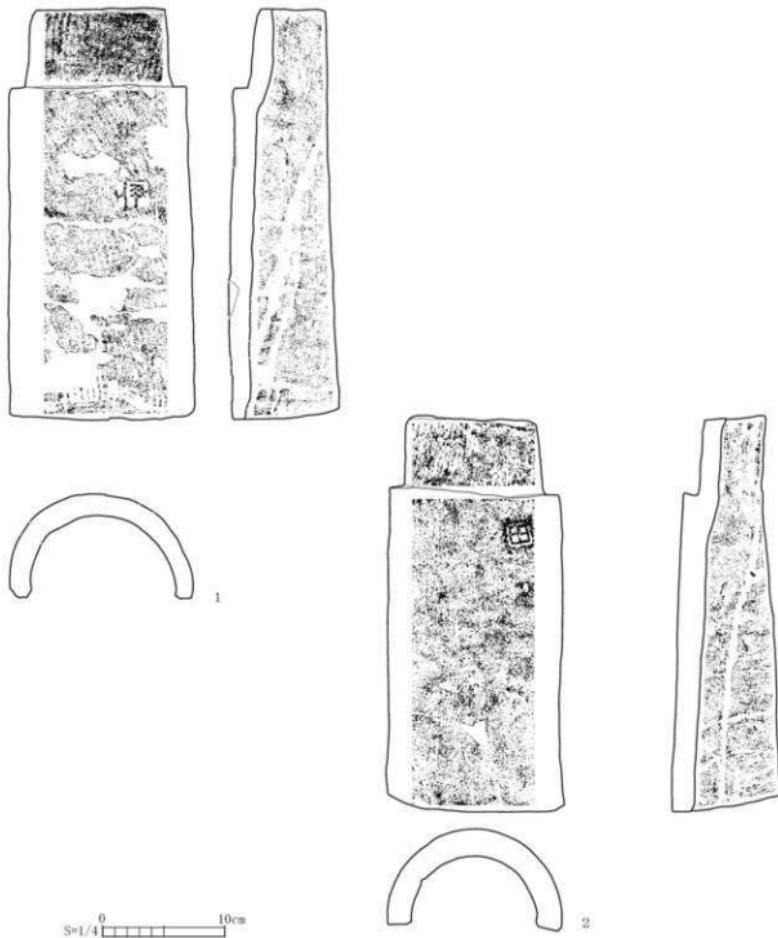
第9図 S11780竪穴住居跡平面・断面図



(単位: cm)

番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	取り上げ 番号	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面							
1	土器器 环	S I 1780 埴土 8 層	手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ 黒色処理	—	3.0 24/24	—	—	7-1	R15	A I 類-b
2	土器器 环	S I 1780 埴土 4 層		ヘラミガキ 黒色処理	11.8 10/24	7.4 24/24	2.65	—	7-2	R10	B II 類
3	須恵器 甕	S I 1780 カマド下 周溝	ロクロナデ	ロクロナデ	(20.4) 5/24	—	—	6		R6	
4	須恵器 甕	S I 1780 カマド下 周溝	平行叩き、ロクロナデ	ロクロナデ	(23.0) 1/24	—	—	3		R7	
5	須恵器 甕	S I 1780 カマド奥壁 12 層 北東隅周溝 11 層	平行叩き	指当痕	—	5.1 18/24	—	5		R17	

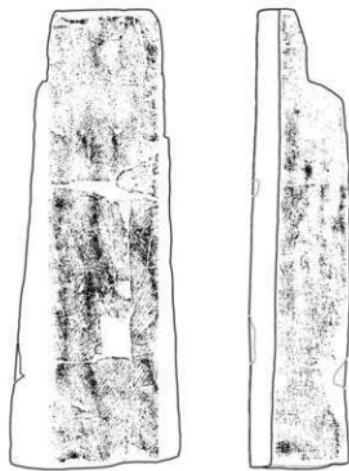
第10図 S I 1780出土遺物 1



(単位: cm)

番号	種類	層位	特徴		長さ	広端部幅	狭端部幅	厚さ	取り上げ 番号	写真図版	登録 番号	備考
			外面	内面								
1	丸瓦	S I 1780 カマド 構築土	繩印き→ナデ	布目	33.5	15.0	10.5	1.75	1	8-1	R1	II B類-a 刻印「伊」
2	丸瓦	S I 1780 カマド下 周溝	繩印き→ナデ	布目	32.0	14.3	10.4	2.2	9	8-2	R3	II B類-a 刻印「伊」

第11図 S I 1780出土遺物 2



1



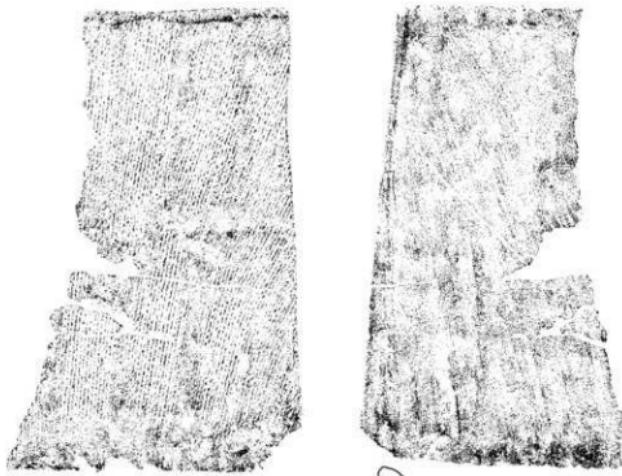
2

0
S=1/4 10cm

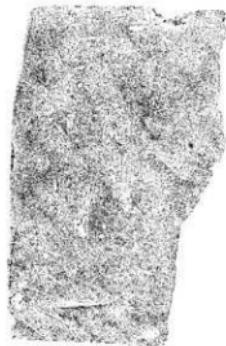
(単位: cm)

番号	種類	層位	特徴		長さ	広端部幅	狭端部幅	厚さ	取り上げ 番号	写真図版	登録 番号	備考
			外面	内面								
1	丸瓦	S I 1780 焼造土 カマド下 周溝	平行叩き→ヘラケズリ	布目	37.2	13.8	7.8	2.1	2・7・ 8・13	9-1	R16	I A類
2	丸瓦	S I 1780 カマド下 周溝 カマド奥壁 12層	調叩き、布目	布目→ナデ	-	-	-	1.7	4・10	7-3	RS	II B類-a1

第12図 S I 1780出土遺物3



1



2

S=1/4 0 10cm

(単位: cm)

番号	種類	部位	特徴		長さ	広幅部幅	狭端部幅	厚さ	取り上げ 番号	写真団版 番号	登録 番号	備考
			外面	内面								
1	平瓦	S I 1780 カマド下 周溝	繩印き	布目→ナゲ	38.4	—	—	2.5	11	9-2	R2	II B類-a1
2	平瓦	S I 1780 カマド下 周溝	繩印き→ナゲ	布目→ナゲ	28.7	—	—	2.6	14	10-1	R1	II A類-a

第13図 S I 1780出土遺物 4

1区検出遺構（第4図）

S D1774溝跡

【位置】東側で発見した北壁から南に延び東へ大きく湾曲する溝跡であり、北端と東端は調査区外に延びる。

【方向・規模】規模は全長3.8m以上、上幅は23～40cmである。

【埋土】褐色粘質土である。

【遺物】須恵器の破片が出土している。

S E1769井戸跡

【位置】西側で発見した不整形の井戸跡である。南東部を検出し、そのほかの部分は調査区外である。

【規模・平面形】東西2.4m以上、南北1.6m以上である。

【埋土】Ⅲ層と近似する明黄褐色粘土だが、Ⅲ層と比べると粘性が弱く、しまりもない。

【遺物】出土していない。

S K1771土壙

【位置】中央東側で発見した楕円形の土壙である。

【規模・平面形】規模は長径93cm、短径82cmの南北に長い楕円形である。

【埋土】Ⅲ層に近似する黄褐色土だが色がやや暗くすんでいる。

【遺物】須恵器の破片が出土している。

S K1772土壙

【位置】中央東側で発見した円形の土壙である。

【規模・平面形】規模は直径79cmの円形である。

【埋土】SK1771の埋土と近似する黄褐色土である。

【遺物】出土していない。

S X1773

【位置】中央東側で発見した性格不明の遺構である。

【重複】北端部でピットと重複し、それよりも古い。

【規模・平面形】南北に細長い溝状の形をしており、規模は東西幅22～39cm、南北幅69cm以上である。

【埋土】明褐色粘質土でⅢ層よりも色調は暗くすみ、Ⅲ層よりも粒が大きい。

【遺物】出土していない。

2区検出遺構（第5図）

S X1776

【位置】東側で発見した性格不明の遺構である。南側は調査区外に延びる。

【重複】北辺中央に焼土を含んだ楕円形のピットがあり、それよりも古い。

【方向・規模】規模は東西1.9m、南北1.4m以上の方形である。

【埋土】Ⅲ層と近似した明黄褐色粘土だが砂粒が含まれており、Ⅲ層よりもしまりがなく、粘性がない土である。

【遺物】出土していない。

S X1777

【位置】東側で発見した性格不明の遺構である。北側と東側は後世のカクランで壊されている。南側は調査区外に延びる。

【方向・規模】規模は東西1.6m以上、南北1.5m以上である。平面形は不明である。

【埋土】Ⅲ層に近似した黄褐色粘土で、Ⅲ層より粘性がやや弱い。

【壁・底面】壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。

【遺物】須恵器坏と土師器の破片が出土している。

S E1775井戸跡(第14・15図)

【位置】中央で発見した石組みの井戸跡である。東半部は後世のカクランで壊されている。南半部は調査区外へ延びる。

【重複】ピットと重複し、それよりも古い。

【平面形・規模】規模は東西1.3m以上、南北1.7m以上の楕円形と考えられる。

【埋土】2層に分けられる。1層は暗褐色土をブロック状にやや含む褐色粘質土で、井戸の廃絶後に井戸側の内部に堆積した土である。2層は暗褐色土をまだら状にやや多く含む黄褐色粘質土でⅢ層に近似しているが色調はⅢ層と比べて暗くすみ、粒も大きい。井戸の掘方埋土である。

【壁・底面】井戸側の北端から北へ22cm、深さ24cmのところで平らになる。平らな面より下はやや外反しながら立ち上がり、平らな面より上は緩やかに立ち上がっている。

【井戸側】自然石を積み上げて井戸側としている。壁はやや外反しながら立ち上がっている。規模は東西83cm以上、南北が77cm以上である。

【遺物】2層から土師器坏（B類）・甕（B類）・小瓶（第15図-1）、須恵器坏（IV類）（第15図-2）・瓶が出土している。そのほかにも土師器坏（A II類・B類）・甕（B類）、須恵器坏（I類）・瓶が出土している。

3区検出遺構(第6図)

S D1779溝跡

【位置】東側で発見した南北溝跡であり、南側は後世のカクランで壊されている。

【重複】南側がピット、北側がSK1778と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】方向は北で約5度東に偏している。規模は全長72cm以上、上幅は25cmである。

【埋土】黄褐色土である。

【遺物】出土していない。

S D1781溝跡

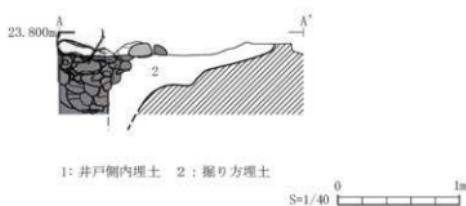
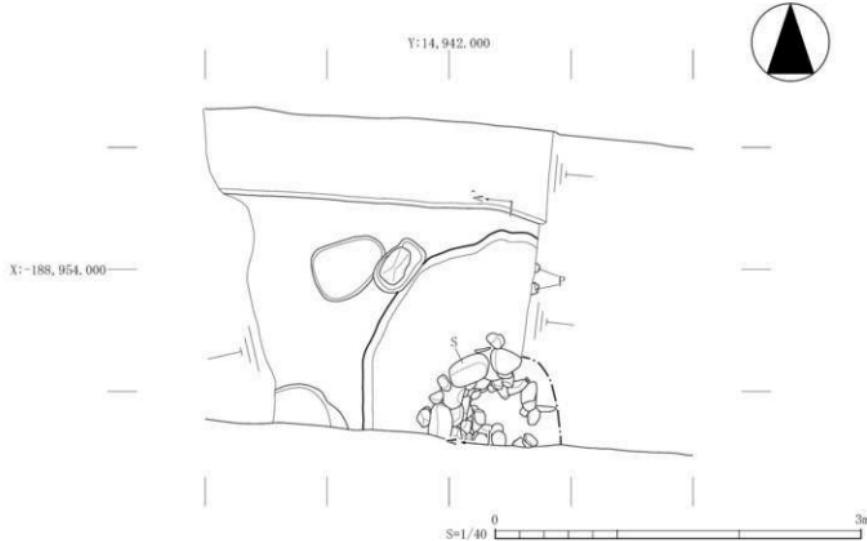
【位置】東側で発見した南北溝跡であり、北側は調査区外へ延びる。

【重複】SK1778と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は北で約4度東に偏している。規模は全長1.3m以上、上幅は最大幅52cmで南へ行くにしたがって細くなっていく。

【埋土】黄褐色土である。

【遺物】出土していない。



第14図 S E 1775井戸跡平面・立面図



第15図 S E 1775出土遺物

S K 1778土壤

【位置】東側で発見した土壤であり、東側は後世のカクランで埋められている。北半部は調査区外に延びる。

【重複】SD 1779とSD 1781と重複し、SD 1781よりも古く、SD 1779よりも新しい。

【規模・平面形】直径72cm以上の円形と考えられる。

【埋土】III層の土をブロック状に多く含む黄褐色土で、炭化物、焼土を多く含んでいる。

【遺物】出土していない。

堆積層その他の遺物

I層からは土師器壺・甕・高台付壺、須恵器壺・甕・瓶・蓋、瓦、青磁壺（大宰府編年龍泉窯系青磁壺III類）の破片が、II層からは土師器壺・甕、須恵器壺・甕・瓶、瓦の破片が出土している。また2区のカクランからは、緑釉陶器皿の破片が出土している。

3まとめ

(1) 古代の堅穴住居跡について

今回の調査では2軒の堅穴住居跡を発見した。このうちS I 1780堅穴住居跡は、カマド下部の周溝やカマドの奥壁に瓦や土器を埋設する施設を有していた。特に瓦は、多賀城跡や多賀城廃寺等で使用された可能性があることから、本地域の集落特有の地域性と考えられる。ここではS I 1780の構築から廃絶までの過程と、周辺集落の様相、瓦を使用した堅穴住居跡について述べ、高崎遺跡で確認されている堅穴住居跡の特徴をまとめたい。

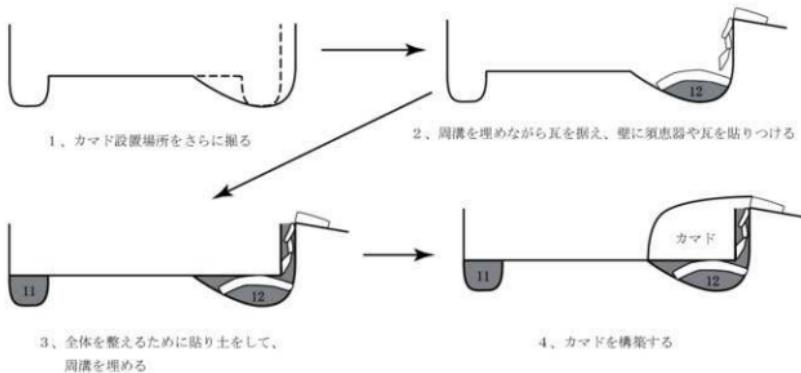
(a) S I 1780堅穴住居跡について

① S I 1780堅穴住居跡のカマド下の構造（第16・17図）

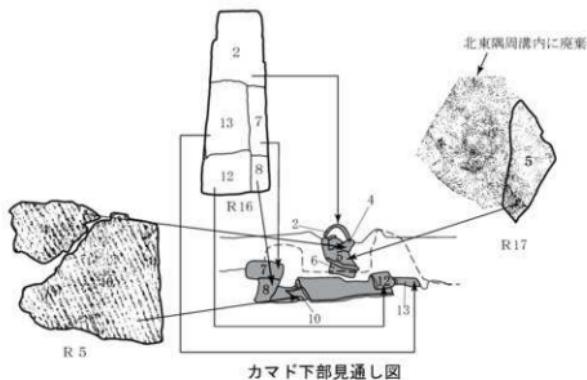
S I 1780堅穴住居跡のカマド下の構造については、第16図のように理解でき、以下の状況からカマド下の周溝やカマドの構築の過程がわかる。

1. カマド下部の周溝が他の場所に比べて37.2cm掘りくぼめられている。また壁面も9.8cm掘りくぼめられている。このことから瓦や土器を設置するための下準備としてカマド設置場所をさらに掘りくぼめたと理解できる。

- 瓦の下に12層が確認できたことから、1で掘りくぼめたスペースを12層で整形しながら、瓦を凸面が上になるように据え、周溝を暗渠状にする。同時に、煙道へと続く奥壁に須恵器や瓦を貼りつけたと理解できる。
- 瓦や土器を覆うように12層が確認でき、周溝埋土の11層も12層と同質の土である。また、カマド奥壁に設置されていた須恵器壺片と、北東隅の周溝から出土した須恵器壺片が接合した。これらのことから、瓦や土器を覆うように12層と同質の土を貼り、全体を整形し、同時に周溝を埋めたと理解できる。(註1)。
- カマドを構築する。



第16図 S I 1780の構築手順模式図



第17図 S I 1780の接合した瓦の位置図

これらの検討から、カマド下部の施設が、堅穴住居構築段階の当初から計画的に作られていたことがわかる。なお、カマド下部に据えられていた瓦や壁に貼り付けられていた須恵器や瓦について、第17図の丸瓦（R16）は第17図の№2・7・8・12・13が接合したものであり、同様に第17図の平瓦（R5）は№4・10が、第17図の須恵器甕（R17）は№5と北東隅の周溝から出土したものとそれぞれ接合する。このことからカマド構築の際には、元の形のまま瓦を据えたり須恵器を貼りつけたりするのではなく、据える場所に応じた大きさに分割してから使用されていたと考えられる。

② S I 1780堅穴住居の廃絶（第18図）

S I 1780堅穴住居の廃絶については、第18図のように理解でき、以下のような状況から廃絶の過程がわかる。なお、床面の上に自然堆積層がないことから、廃絶後すぐに埋められたと考えられる。

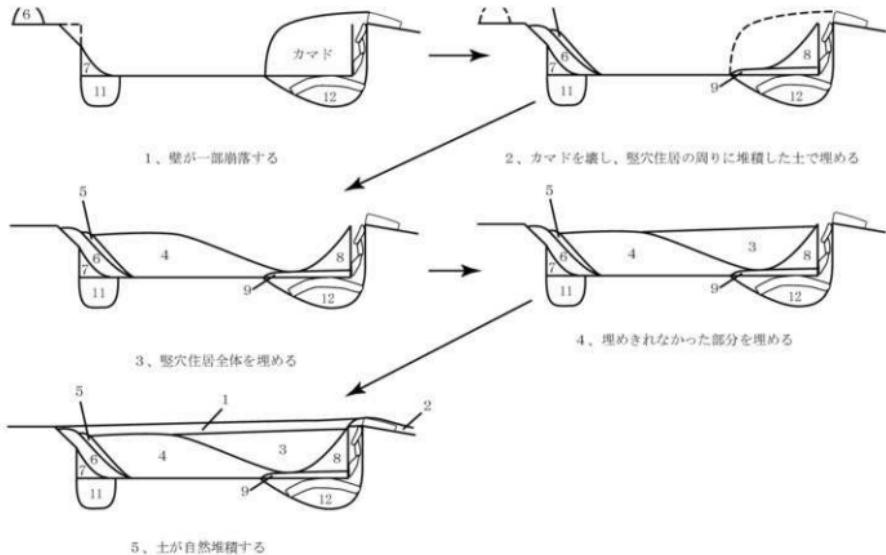
1. 7層の堆積範囲が東壁際のみで認められ、壁面が崩落した範囲と一致する。のことから7層は、壁の崩落土と考えられる。
2. カマド崩落土の8層がカマド東側壁の外側で確認でき、人為埋土としている4層よりも下層で確認できた。のことからカマドは、西から東へ向けて壊されたことがわかる。また、東壁際に炭化物を若干含んだ褐色土（6層）と6層の上に堆積するⅢ層に似た土（5層）が確認できた。5・6層は、人為的な埋め土である4層よりも下層にある。のことから6層は、住居を埋め立てる際に住居の周りに堆積していた土が埋め土として利用されたと推定した。この場合、5層は、6層で住居を埋める際に混入したⅢ層の土と理解できる。
3. S I 1780堅穴住居跡全体で確認できる褐色粘質土（4層）にはⅢ層ブロックが全体にまんべんなく混入している。のことから4層は、人為埋土であり、S I 1780は、人為的に埋められたと考えられる。
4. 4層や8層の上で確認した土（3層）には、焼土や炭化物が混入している。のことから4層で埋めきれなかった部分を煙道周辺の土を利用して埋めたと理解した。
5. 煙道内で確認した土（2層）や堅穴住居跡全体を覆う土（1層）が自然堆積する。

③ S I 1780堅穴住居跡の年代

①からは、S I 1780堅穴住居跡のカマド下の構造、②からは、廃絶の過程を確認できた。これらのことから構築と廃絶の年代を出土遺物から検討する。なお、1・2層から出土した遺物は、堅穴住居が埋められた後のものと考えられるため遣構の年代を直接反映していないと判断する。

構築時の遺物は、カマド下部の周溝、カマド構築土、周溝埋土の11層から出土しており、政庁II期に位置付けられる「伊」の刻印が押印された丸瓦II B類-a、「田」の刻印が押印された丸瓦II B類-a、平瓦II B類-a 12点、非クロ調整の土師器甕（A類）2点、クロ調整の土師器甕（B類）1点がある。出土数が少ないものの土師器甕B類が出土していることを考慮すれば、住居構築の時期は、8世紀後葉頃が上限年代と考えられる。

廃絶時の遺物は、カマド崩落土や住居内埋土4・6層から出土しており、非クロ調整の土師器甕A I類-b 1点、クロ調整の土師器甕B II類3点、土師器甕A類76点、B類88点がある。第10図-1の土師器甕A I類-bは、カマド崩落土に覆われるよう埋まっていた。のことから第10図-1の土師器甕A I類-bは、住居機能時に使用されていたものが、廃絶時に廃棄されたと考えられる。土師器甕B II類3点、土師器甕A類76点、B類88点のうち4層から出土したものは、土師器甕B II類2点、土師器甕A類55



第18図 S I 1780の廃絶手順模式図

点、B類73点である。これらの遺物は、4層に覆われるよう埋まり、住居中央にまとまって出土していた。このことから4層出土の遺物は、住居機能時に使用されていたものが、廃絶時に廃棄されたと考えられる。以上のことからこれらの遺物の年代は住居機能時の年代に極めて近いと考えられる。土師器壺A・B類の割合を見ると、A類が46%、B類が54%であり、土師器壺B類がわずかに多く、延暦9（790）年以降から延暦24（805）年以前に比定される市川橋遺跡S X1351Cの出土傾向と類似している（多賀城市教育委員会2003）。さらに、土師器壺B II類は、底径/口径が0.62、器高/口径が0.22、外傾度は37度であり、市川橋遺跡S X1351C出土の須恵器壺の数値と類似している。

これらのことと総合すると、S I 1780は、8世紀後葉頃に構築され、遅くとも、9世紀初頭頃に廃絶したと理解できる。

(b) S I 1770堅穴住居跡の年代

S I 1770堅穴住居跡の埋土は、2層あり、共に自然堆積した土である。1層からは、土師器壺のA類が3点、B類が35点出土している。土師器壺A・B類の割合を見るとA類が8%、B類が92%であり、B類の割合が圧倒的に多い。このような出土傾向は、延暦24（805）年から9世紀中葉頃とされている市川橋遺跡S X1351Dの出土遺物の傾向と類似していることから（多賀城市教育委員会2003）、S I 1770・1層の出土遺物も同じ年代と考えられる。2層からは、土師器壺A類1点、A I類-b 1点、土師器壺A類1点、B類6点、須恵器壺I類3点、II類1点が出土している。第8図-3・4の須恵器壺は、住居内に廃棄されたり、2層内に自然に混入したりしたとは考えにくいため、住居廃絶時に廃棄されたと考えられる。よって、これらの

須恵器壺の年代は、住居機能時の年代に極めて近いと考えられる。出土遺物の傾向を見ると、土師器壺は破片資料であるものの土師器壺A・B類が認められ、須恵器壺ではV類が全く認められない。この傾向は、延暦9（790）年以前の8世紀後葉頃と考えられる市川橋遺跡SX1351A・Bと類似している。また、須恵器壺I類は、底径/口径が0.54、器高/口径が0.29、外傾度は32度、須恵器壺II類は、底径/口径が0.64、器高/口径が0.28、外傾度は29度であり、市川橋遺跡SX1351Aの出土遺物からも類似するものが認められる。このことから、S I 1770・2層の出土遺物の年代は、延暦9（790）年以前の8世紀後葉頃と考えられる。2層は住居床面直上に堆積したものであり、出土遺物は廃絶期に近いものであると理解できるところから、S I 1770堅穴住居跡の下限年代は8世紀後葉頃と考えられる。

（c）小結

- ① S I 1770の年代は、延暦9（790）年以前の8世紀後葉頃、S I 1780の年代は、延暦9（790）年以降の8世紀後葉から9世紀初頭頃の堅穴住居跡である。2つの堅穴住居跡は、近い位置にあることや同一の方向をとることから同じ集落のものと考えられる。
- ② S I 1780のカマドには、奥壁に須恵器や瓦が貼りつけられ、カマド下部の周溝には瓦が暗渠状に敷かれていた。

（2）多賀城廃寺跡周辺の集落（第19図・表1）

（a）集落の様相

今回の調査では、2軒の堅穴住居跡を確認できた。高崎遺跡で確認されている堅穴住居跡の位置や軒数は、第19図、表1のとおりである。これをみると堅穴住居跡の分布は、多賀城廃寺から見て北東と南西に認められる。特に今回の調査を含めた第12・21・100次調査が行われた地域では11軒、第10次調査が行われた地域では57軒と多賀城廃寺の近くで堅穴住居跡が多く確認されている（註2）。

これらの堅穴住居跡の年代を見ると、8世紀中葉から9世紀代までのものが49軒と多く見られるのに対して、10世紀以降のものを見ると3軒と少ない。また、8世紀前葉のものも2軒と少なく、この年代の堅穴住居跡は、多賀城創建の頃に建てられたと考えられる。

（b）瓦を使用した堅穴住居跡について

今回の調査で発見したS I 1780は、住居構築材として瓦を使用した堅穴住居跡である。高崎遺跡では、今回の調査のほかにも瓦を使用した堅穴住居跡が確認されており、位置や軒数は第19図、表1のとおりである。瓦を使用した堅穴住居跡は多賀城廃寺の近くに多く見られ、以下の3種類に分けられる。

A類：カマド下の周溝に瓦を使用した堅穴住居跡

B類：周溝や外延溝に瓦を使用した堅穴住居跡

C類：A・B類以外の場所に瓦を使用した堅穴住居跡（例：煙道の構築材として使用）

A類の堅穴住居跡は、8世紀後葉から9世紀前葉に多く認められる。B類の堅穴住居跡は、8世紀後半から9世紀後半頃という長い期間で認められる。C類の堅穴住居跡は、9世紀中葉から後葉頃に認められる。また、第29・30・67次調査以外の瓦を使用した堅穴住居跡の瓦は、出土数は多くないが堅穴住居跡の年代に関係なく政庁I期の瓦がよく見られる。

瓦を使用した堅穴住居跡の年代で最も古いものは、第19次調査で確認されているS I 1327であり、出土遺物より延暦9（790）年以前の8世紀後葉頃のものと考えられる（註3）。また、最も新しいものは第67次調査で確認されているS I 1711であり貞觀11（869）年を上限年代としている（多賀城市教育委員会



第19図 高崎遺跡検出堅穴住居跡位置図

調査次数	年代							合計
	8世紀前葉	8世紀中葉	8世紀後葉	9世紀前葉	9世紀中葉	9世紀後葉	10世紀	
第52次						2	2	4
第62次			1(8C後半～9C初頭)				4	5
第92次						1		1
第10次	10(8C)●■			9(9C以前)●■■■■			38●■	57
第11次	1				2(9世紀)			3
第12次			1(8C末～9C前葉)●■				3	5
第15次					1(9C以後)		1	2
第16次						1		1
第17次	2	3					3(古墳時代)	8
第19次	1●						4	5
第21次			4(8C末～9C中葉)●					4
第22次						1		1
第23次							1	1
第26次			1(8C中葉～9C)				1	2
第29・30次					1▲			1
第42次				1(8C後葉～9C)				1
第52次							2	2
第56次	1	3	1					5
第65次			1					1
第67次					1▲			1
第68次				1(8C後葉～9C)				1
第69次		1						1
第100次			2●					2

●: A類の堅穴住居跡 ■: B類の堅穴住居跡 ▲: C類の堅穴住居跡

表1 高崎遺跡で確認されている堅穴住居跡一覧

2009)。このことから延暦9(790)年以前の8世紀後葉頃から竪穴住居に瓦が使用されていると考えられる。

(3) その他の遺構について

S E1775井戸跡は自然石を積み上げて井戸側としている石組みの井戸である。出土遺物は、古代のもののみだが、宮城県内において古代の石組みの井戸跡は確認されていない。仙台市の松木遺跡において確認されている中世の石組みの井戸跡B区S E-1、C区S E-1が、宮城県内では最も古い石組みの井戸跡である(仙台市教育委員会1986)。B区S E-1とS E1775は掘り方の途中で段を作るところが類似している。このことからS E1775井戸跡の年代は中世以降のものと考えられる。

(4) まとめ

今回の調査で確認したS I1770竪穴住居跡とS I1780竪穴住居跡は、同じ集落のものでありほぼ同時期に存在していたことがわかった。また、S I1780竪穴住居跡は、カマド下部の周溝に瓦を使用した竪穴住居跡であり、8世紀後葉頃から9世紀初頭頃という年代から高崎遺跡で確認されている瓦を使用した竪穴住居跡の中でも比較的古い段階のものであることがわかった。

高崎遺跡では、多賀城廃寺の北東と南西に竪穴住居跡の分布が認められ、瓦を使用した竪穴住居跡は、多賀城廃寺の近くに多く認められ、8世紀後葉頃から竪穴住居に瓦が使用されていると考えられる。瓦を手に入れることができる環境にあることから多賀城跡や多賀城廃寺と関係する人が住んでいたと考えられる。

註1 北東隅の周溝から出土した第10図-3の須恵器壺片は、二次加工や再利用の痕跡が認められないことから、この須恵器壺片が住居機能時に使用されていたとは考えにくい。このことから第10図-3の須恵器壺片がカマド構造とは同時期に周溝内に捨てられた可能性が高い。よって、カマド下部の周溝と、住居にめぐらされた周溝は同時期に埋められたことがわかる。

註2 本地区周辺の地質的な環境は、北西側は斜面となっており、南東側は谷が入り込む地形である。多賀城廃寺を除くと居住できる平地は北東部と南西部に限られてくる。

註3 高崎遺跡第19次調査は未公表だが、S I1327の出土遺物を観察すると、土師器壺が非ロクロ調整のもののみで構成される。多賀城周辺ではロクロ調整の土師器壺は8世紀後葉以降に見られることから下限年代は8世紀後葉と考えられる。

参考文献

- 仙台市教育委員会 『柳生 土地区画整理事業に伴う柳生地区的道路分布調査と、松木遺跡の発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書 1986
多賀城市教育委員会 『高崎遺跡－都市計画街路高崎大代線外 1 線建設工事開闢発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第11集 1996
多賀城市教育委員会 『高崎遺跡－都市計画街路高崎大代線外 1 線建設工事開闢発掘調査報告書II－』多賀城市文化財調査報告書第12集 1987
多賀城市教育委員会 『山王遺跡ほか－発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第34集 1993
多賀城市教育委員会 『高崎遺跡－第11次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第37集 1995
多賀城市教育委員会 『高崎遺跡－第13～16次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第42集 1996
多賀城市教育委員会 『高崎遺跡－第22次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第52集 1998
多賀城市教育委員会 『小沢原遺跡・高崎遺跡－史跡連絡線開通道路発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第44集 1999
多賀城市教育委員会 『高崎・山王遺跡－市川橋遺跡 東田中塙前遺跡 稲荷殿地区』多賀城市文化財調査報告書第56集 1999
多賀城市教育委員会 『高崎・西沢遺跡－高崎遺跡第26次・西沢遺跡7次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第63集 2001
多賀城市教育委員会 『高崎遺跡－新田南陽町御用道跡調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第65集 2002
多賀城市教育委員会 『市川橋遺跡－坂城土地区画整理事業に係る発掘調査報告書II－』多賀城市文化財調査報告書第70集 2003
多賀城市教育委員会 『市川橋遺跡・高崎遺跡－市川橋遺跡第30・36次調査高崎遺跡第42次調査－』多賀城市文化財調査報告書第72集 2003
多賀城市教育委員会 『多賀城市内の遺跡 1－平成17年度発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第88集 2007
多賀城市教育委員会 『高崎遺跡－第96次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第89集 2007
多賀城市教育委員会 『小沢原遺跡ほか 小沢原遺跡第10次調査 留ヶ谷遺跡第5次調査 高崎遺跡第68次調査 高原遺跡第6次調査』多賀城市文化財調査報告書第92集 2008
多賀城市教育委員会 『多賀城市内の遺跡 1－平成19年度発掘調査報告書はか－』多賀城市文化財調査報告書第96集 2009
多賀城市教育委員会 『高崎遺跡－第69次発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第97集 2009
官城県多賀城跡調査研究所 『多賀城跡 政厅跡本文編』多賀城史研究会 1984
古代城柵官衙遺跡検討会 『第23回古代城柵官衙遺跡検討会資料』 1997



1区調査区全景（西より）



2区調査区全景（西より）



3区調査区全景（西より）



4区調査区全景（西より）

写真図版1



S I 1770検出状況（北東より）



S I 1770掘り下げ状況（北東より）

写真図版2



S I 1780検出状況（南より）



S I 1780掘り下げ状況（東より）



S I 1780カマド (南より)



S I 1780カマド下部遺物出土状況 (南より)

写真図版4



S E 1775検出状況（北東より）



S E 1775井戸側内掘り下げ状況（東より）



1 須恵器壺（第8図-2）



2 須恵器壺（第8図-3）



3 須恵器壺（第8図-4）

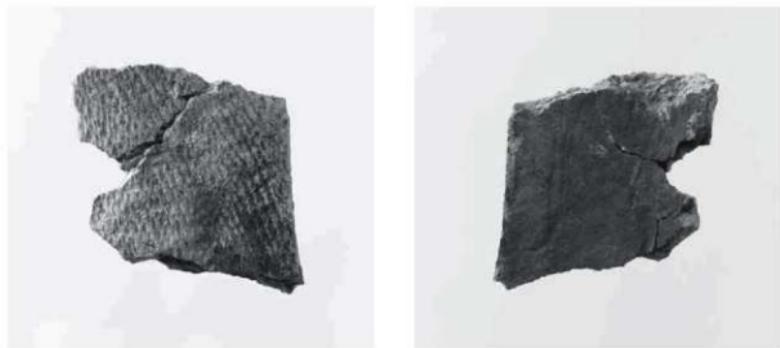
写真図版6



1 土師器坏 (第10図-1)



2 土師器坏 (第10図-2)



3 平瓦 (第11図-4)



1 丸瓦 (第11図-1)



2 丸瓦 (第11図-2)

写真図版 8



1 丸瓦（第11図-3）



2 丸瓦（第12図-1）

写真図版 9



1 平瓦 (第12図-2)



S I 1780 カマド下周溝、カマド奥壁12層出土遺物

写真図版10



1 土師器小瓶（第15図－1）



2 須恵器坏（第15図－2）

X 東田中窪前遺跡第7次調査

1 調査に至る経緯と経過

本件は、東田中一丁目地内における宅地造成工事に伴う試掘・確認調査である。平成26年4月、地権者より当該区における宅地造成工事計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、計画地全域を2.5～3m掘削し9区画の宅地を造成することが示されていた。本地区では、北端部で実施した第1次調査（平成7年）の際に、現表土下15～30cmでSA1柱列跡等を確認していることから、遺跡に与える影響が懸念された。このため、本発掘調査にかかる事業量を積算するための試掘・確認調査を実施することで協議を進め、7月15日に発掘調査の依頼・承諾書の提出を受け、29日より現地調査を開始した。

はじめに、対象区内に1～6区の調査区を設けた。

当該区は、およそ垂直に切り立つ残丘上に位置しており、現状では重機の搬入が不可能であることから、作業員を動員し人力により表土除去を行う。この結果、調査区中央から東側の現表土20～30cmで、溝跡や土壤、柱穴などを検出した。一方、調査区西側には1m以上の盛土が堆積しており、人力での掘削は困難であったため、今次調査での遺構確認は断念した。8月20日から遺構の精査、写真撮影、平面図作成などを順次行い、27日にこれらの作業を終了した。8月29、30日に調査区の埋め戻しを行い、本調査の一切を終了した。

2 調査成果

調査区中央から東側で、溝跡、土壤、柱穴を検出した。いずれも現表土（I層）下20～30cmの褐色粘質土（II層）上面で確認したものである。以下、主な遺構を記載する。

S D13溝跡（第2図）

【位置・形態】1区南側で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】他の遺構との重複はない。

【方向・規模】方向は東で約27度北に偏している。長さ2.3m以上、上幅1.5～2.0mである。

【遺物】出土していない。

S D14溝跡（第2図）

【位置・形態】1区北半部で発見した、東西方向の溝跡である。

【重複】他の遺構との重複はない。

【方向・規模】方向は東で約20度北に偏している。長さ2.3m以上、上幅約35cmである。

【遺物】出土していない。



第1図 調査区位置図

S D15溝跡（第2図）

【位置・形態】5区で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】他の遺構との重複はない。

【方向・規模】方向は北で約33度西に偏している。長さ1.6m以上、上幅約50cmである。

【遺物】出土していない。

S D16溝跡（第2図）

【位置・形態】3区で発見した、南北方向の溝跡である。

【重複】他の遺構との重複はない。

【方向・規模】方向は北で約15度西に偏している。長さ1.8m以上、上幅約1.3cmである。

【遺物】出土していない。

柱穴（第2図）

6区中央より東側全域で確認できる。今回の調査では建物として組み合うものは確認できなかつたが、規模・形態をみると、長軸70cm前後の楕円形ものや、一辺60cmの方形のもの、直径30cm程度の円形のもの等様々である。

3 まとめ

(1) 溝跡や土壙、柱穴などを発見した。

(2) 柱穴には、形態や規模などが異なるものが数種類ある。周辺の調査成果をみると、一辺60cmほどの方形を呈するものは古代、直径30cmの円形のものは中世・近世の柱穴と近似する。詳細は今後の調査成果にゆだねるもの、本地区には複数の時代に及ぶ遺構の存在が推測される。

参考文献

多賀城市埋蔵文化財調査センター『多賀城市埋蔵文化財調査センター年報—平成7年度—』1997

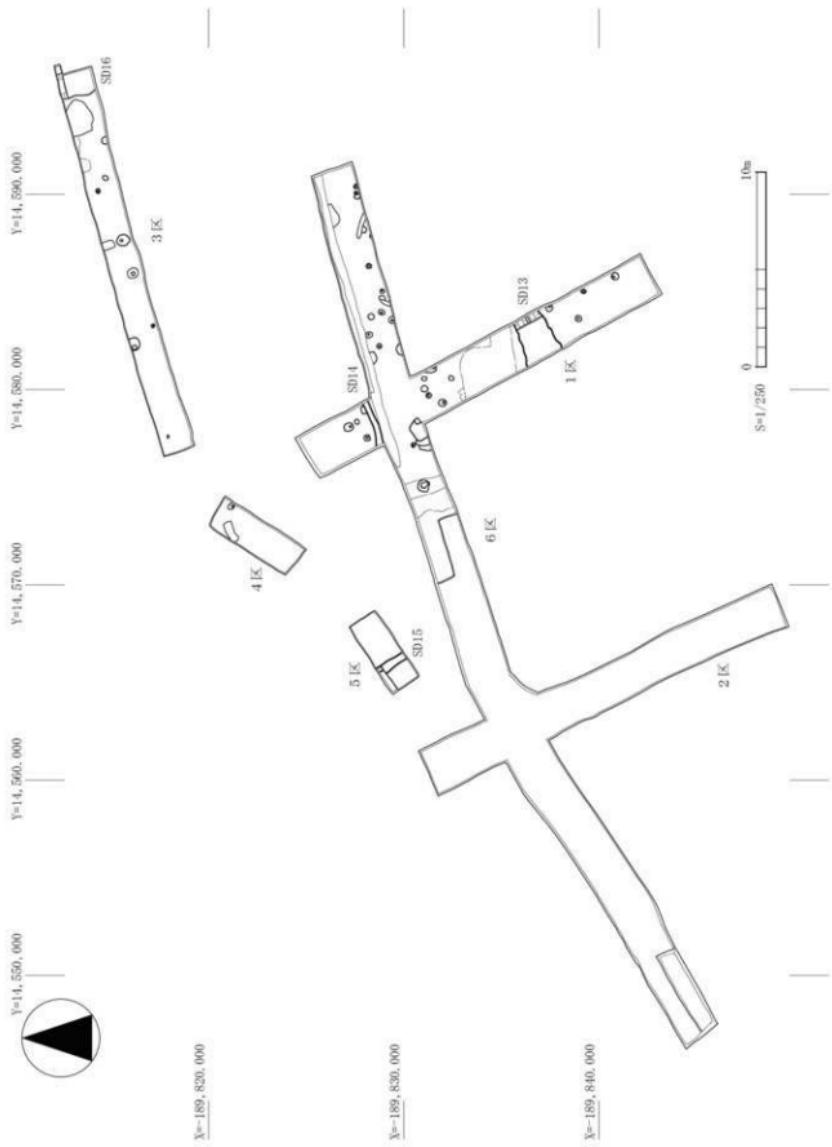


図2 調査区全体圖



調査区遠景（西より）



1区中央から北側（南より）



3区全景（東より）



6区西端部（南より）

報告書抄録

ふりがな	たがじょうしないのいせき 2							
書名	多賀城市内の遺跡 2							
副書名	平成26年度発掘調査報告書 —新田遺跡 山王遺跡 高崎遺跡 東田中窪前遺跡—							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第119集							
編著者名	武田健市 石川俊英 小原一成 高橋純平							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 Tel: 022-368-0134							
発行年月日	西暦2015年3月27日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新田遺跡 (第98次)	宮城県多賀城市 南宮字庚申248番外12筆	042099	18012	38度 17分 53秒	140度 58分 02秒	20140523 ~ 20140606	224m ²	社員寮建設
新田遺跡 (第100次)	宮城県多賀城市 山王字南寿福寺9番10・12番13	042099	18012	38度 17分 41秒	140度 57分 55秒	20140731 ~ 20140912	27m ²	個人住宅建設
山王遺跡 (第143次)	宮城県多賀城市 山王字西町浦34番4	042099	18013	38度 17分 49秒	140度 58分 19秒	20140603 ~ 20140621	54m ²	個人住宅建設
山王遺跡 (第144次)	宮城県多賀城市 山王字西町浦95番2・10の各一部	042099	18013	38度 17分 49秒	140度 58分 32秒	20140729 ~ 20140913	32m ²	個人住宅建設
山王遺跡 (第145次)	宮城県多賀城市 南宮字伊勢70番外11筆	042099	18013	38度 17分 57秒	140度 58分 38秒	20141023 ~ 20150114	567m ²	JA機械化センター建設
高崎遺跡 (第98次)	宮城県多賀城市 高崎一丁目13-6の一部	042099	18018	38度 17分 47秒	141度 00分 09秒	20140411 ~ 20140419	19m ²	共同住宅建設
高崎遺跡 (第99次)	宮城県多賀城市 高崎一丁目1番1号の一部	042099	18018	38度 18分 14秒	140度 00分 15秒	20140515 ~ 20140516	39m ²	太陽光発電所建設
高崎遺跡 (第100次)	宮城県多賀城市 高崎一丁目14-1	042099	18018	38度 18分 02秒	140度 59分 54秒	20141021 ~ 20141204	250m ²	太陽光発電所建設
東田中窪前遺跡 (第7次)	宮城県多賀城市 東田中一丁目236-4	042099	18037	38度 17分 22秒	140度 59分 58秒	20140729 ~ 20140830	230m ²	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新田遺跡 (第98次)	集落・屋敷		なし	なし	
新田遺跡 (第100次)	集落・屋敷	古墳時代 中世	水田跡、柱穴	青磁	
山王遺跡 (第143次)	集落・都市	古代	道路跡	土師器・須恵器	
山王遺跡 (第144次)	集落・都市	古代 中世	井戸跡、溝跡	土師器・須恵器 須恵系土器・陶器	
山王遺跡 (第145次)	集落・都市	古代	溝跡・土壤	土師器・須恵器	山王147次調査で本発掘 調査
高崎遺跡 (第98次)	集落	古代	溝・土壤	土師器・須恵器・須 恵系土器	
高崎遺跡 (第99次)	集落	古代以降	なし	なし	
高崎遺跡 (第100次)	集落	古代	堅穴住居跡・井戸・ 溝跡	土師器・須恵器・瓦	
東田中 庭前遺跡 (第7次)	集落・城館	古代	柱穴、溝跡		
要 約	新田遺跡第98次調査では、遺跡北側が広範囲で低地であったことを確認した。				
	新田遺跡第100次調査では、古墳時代前期の小区画水田を発見した。				
	山王遺跡第143次調査では、古代都市多賀城の基幹道路である東西大路の延長を確認した。				
	山王遺跡第144次調査では、中世の井戸跡や近世の区画溝を発見した。				
	山王遺跡第145次調査では、古代の溝跡・土壤などを発見した。				
	高崎遺跡第98次調査では、古代の溝跡を発見した。				
	高崎遺跡第99次調査では、遺構・遺物は発見されなかった。				
	高崎遺跡第100次調査では、古代の堅穴住居跡を発見した。				
	東田中庭前遺跡第7次調査では、古代または中世以降と推測される多数の柱穴を発見した。				

多賀城市文化財調査報告書第119集

多賀城市内の遺跡 2

—平成26年度発掘調査報告書—

平成27年3月27日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

宮城県多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022)368-0134

発行 多賀城市教育委員会

宮城県多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022)368-1141

印刷 株式会社 工陽社

宮城県塩竈市尾島町8番7号

電話 (022)365-1151

